

—和歌山県内文化財調査報告会資料集—

地室のひびき



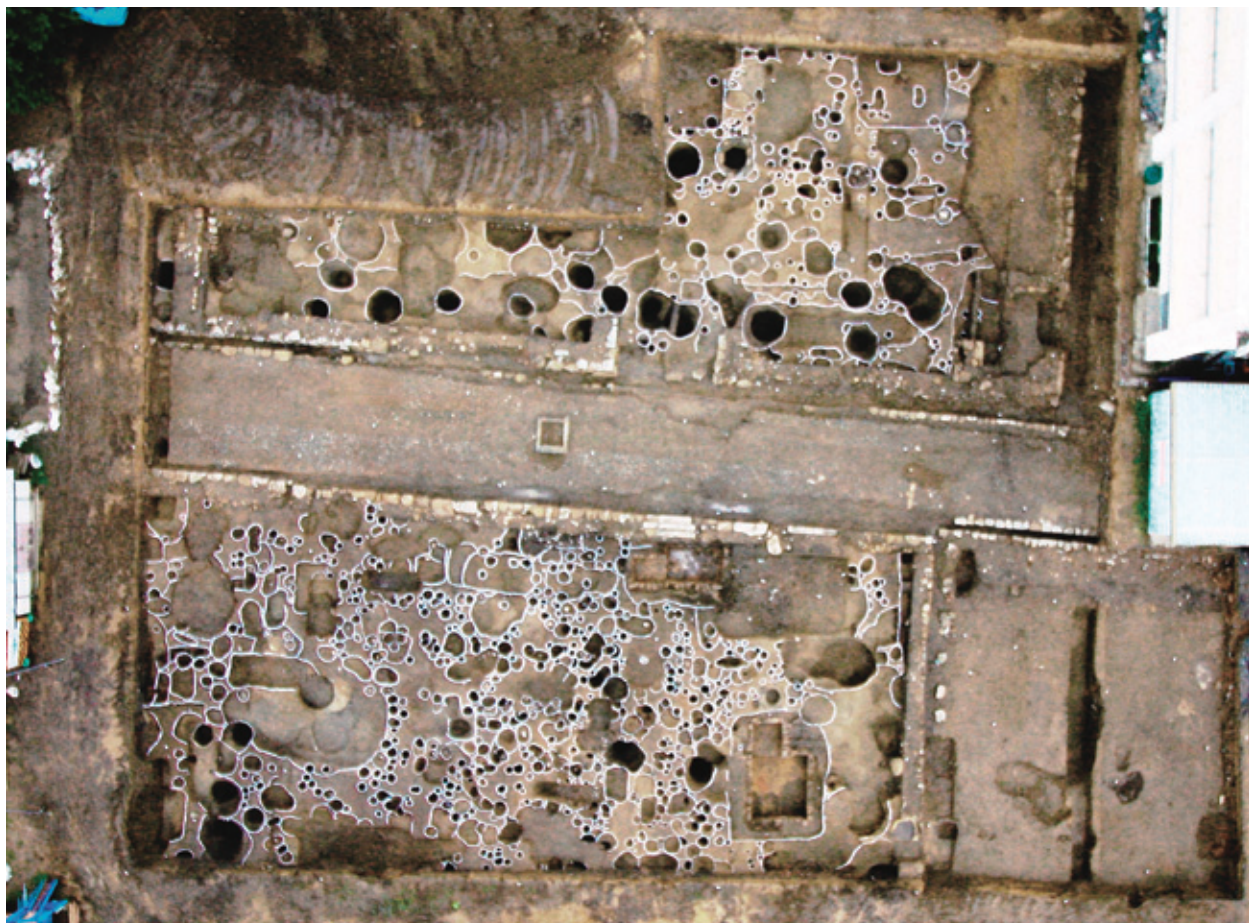
平成28年(2016) 7月16日(土)
公益財団法人 和歌山県文化財センター



寺内古墳群、相方遺跡 2・3区全景（北西上空から）



県史跡佐野寺跡の塔基壇木製外装痕跡（かつらぎ町）



新宮城下町遺跡第2遺構面全景（上空から）



小松原銅鐸

■ 開催にあたって ■

「地宝のひびき—和歌山県内文化財調査報告会—」は、文化財の発掘調査成果をいち早く県民の皆様に提供し、地域の歴史と文化に対する理解と認識を深めていただくことを目的として実施しています。

県教育委員会や県内各市町村の文化財担当者と連携し、平成 18 年度に第 1 回を開催して以来、おかげさまで途絶えることなく 11 回目を迎えることができました。

今回は、平成 27 年度に行われ、新たな知見を得た 3 件の発掘調査の成果のほか、新たに県の史跡となったかつらぎ町所在の「佐野寺跡」、さらには和歌山の至宝ともいうべき特別史跡・岩橋千塚古墳群に追加指定されることになった「天王塚古墳」の概要報告などがなされます。

この報告会を通して、少しでも文化財を身近なものと感じていただくとともに、その保存や活用についても考えをめぐらせていただく機会になれば幸いです。

最後になりましたが、この報告会を開催するにあたりまして、ご協力・ご支援をいただきました多くの機関、関係者の皆様方に深く感謝の意を表します。

平成 28 年 7 月 16 日

公益財団法人 和歌山県文化財センター
理事長 櫻井敏雄

開催日程

- 12:30 開場
- 13:00 開会挨拶
- 13:05 「甦える岩橋千塚の王墓—天王塚古墳の発掘調査—」
和歌山県教育委員会 田中元浩
- 13:40 「大池遺跡と火山灰考古学—旧石器時代から縄文時代の遺跡調査—」
(公財)和歌山市文化スポーツ振興財団 藤藪勝則
- 14:10 休憩
- 14:25 「中世荘園の再開発拠点?—寺内古墳群、相方遺跡の発掘調査—」
(公財)和歌山県文化財センター 村田弘
- 15:45 「住民との協働—佐野寺跡の県史跡指定—」
かつらぎ町教育委員会 和田大作
- 15:15 休憩
- 15:30 「新宮城武家屋敷と中世の物流拠点—新宮城下町遺跡の発掘調査—」
(公財)和歌山県文化財センター 川崎雅史
- 16:00 「御坊市小松原銅鐸・亀山城跡—新規県指定文化財の紹介—」
和歌山県教育委員会 丹野拓
- 16:30 閉会挨拶

開催日時 平成28年7月16日(土) 13:00～16:45

会場 きのくに志学館(和歌山県立図書館)2F 講義・研修室
和歌山市西高松一丁目7-38

主催 公益財団法人和歌山県文化財センター

後援 和歌山県教育委員会、和歌山市教育委員会、かつらぎ町教育委員会、
御坊市教育委員会、新宮市教育委員会、公益財団法人和歌山市文化スポーツ振興財団

目 次

■日 程	3
■掲載遺跡の位置図	5
■発 表	6
Ⅰ 「甦える岩橋千塚の王墓—天王塚古墳の発掘調査—」 和歌山県教育委員会 田 中 元 浩	6
Ⅱ 大池遺跡と火山灰考古学—旧石器時代から縄文時代の遺跡調査— (公財)和歌山市文化スポーツ振興財団 藤 藪 勝 則	12
Ⅲ 「中世荘園の再開発拠点? —寺内古墳群、相方遺跡の発掘調査—」 (公財)和歌山県文化財センター 村 田 弘	18
Ⅳ 「住民との協働—佐野寺跡の県史跡指定—」 かつらぎ町教育委員会 和 田 大 作	26
Ⅴ 「新宮城武家屋敷と中世の物流拠点—新宮城下町遺跡の発掘調査—」 (公財)和歌山県文化財センター 川 崎 雅 史	32
Ⅵ 「御坊市小松原銅鐸・亀山城跡—新規県指定文化財の紹介—」 和歌山県教育委員会 丹 野 拓	38

-
1. 本書は平成 28 年度に公益財団法人和歌山県文化財センターが実施した「地宝のひびき—和歌山県内文化財調査報告会—」の発表資料集である。
 2. 本書掲載資料は正式な報告書が未刊行のため、今後、各資料の位置付けが変更される可能性がある。
 3. 本書の編集は村田 弘・加藤達夫が担当した。

掲載遺跡の位置図



●発表関係遺跡

※ローマ数字は目次のものとは一致しません。

甦える岩橋千塚の王墓

—天王塚古墳の発掘調査—

和歌山県教育委員会 田中元浩

1. はじめに

岩橋千塚古墳群は、和歌山市の岩橋山塊周辺に存在する約 800 基からなる国内最大規模の群集墳である。その一部の範囲については、国の特別史跡に指定され紀伊風土記の丘公園として整備と活用がなされているが、古墳群の多くは史跡地外に存在する。

特に、古墳群内で首長墓とされる 8 基の大型の古墳のうち、特別史跡に指定されているのは大日山 35 号墳と大谷山 22 号墳の 2 基のみである。古墳群の中でも最大規模を誇る天王塚古墳の墳丘は、竹林に覆われ墳丘の一部が損傷するなどその保存についても憂慮されており、追加指定による保護と公有地化による整備が急務とされた。

こうした状況をうけ、和歌山県教育委員会では、平成 26 年度より未指定の大型古墳の特別史跡への追加指定を目的とした岩橋千塚古墳群追加指定事業を開始した。第 1 期事業として、岩橋千塚古墳群内でも最大規模の前方後円墳とされる天王塚古墳と一部が未指定であった大谷山 22 号墳を対象として行うこととした。このうち天王塚古墳については平成 26 年度より伐採作業を行い、平成 27 年度には墳丘の測量調査及び発掘調査を実施した。

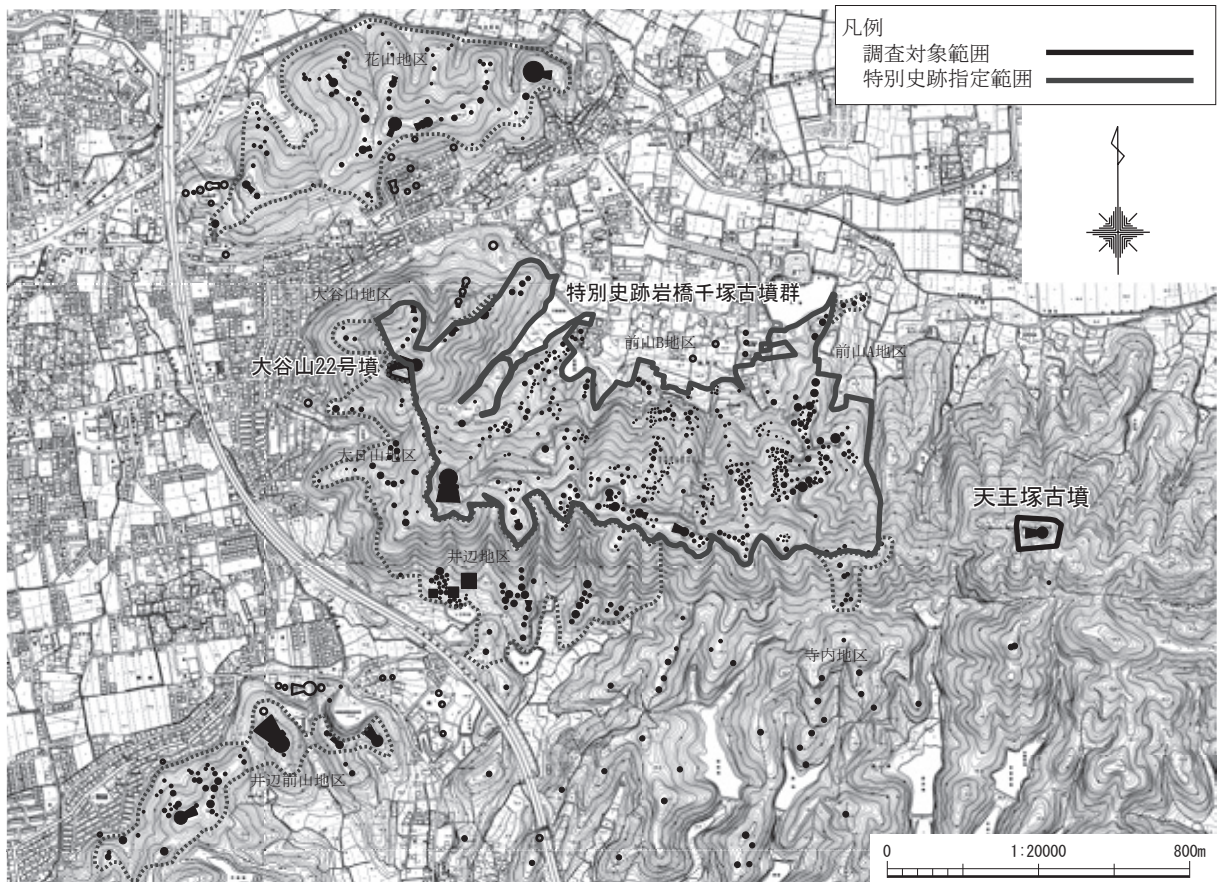


図 1 調査対象範囲と特別史跡指定範囲

2. これまでの調査

天王塚古墳は、和歌山市下和佐及び西に所在し、岩橋山塊の最高所となる標高約 155 m の天王塚山山頂に位置する前方後円墳である。後円部の中央に全長 10.95 m、高さ 5.9 m の横穴式石室が築かれ、南方向に開口する。横穴式石室は、結晶片岩を用いて構築され、垂直石梁 8 本と石柵 2 枚が設けられた岩橋型石室である。石室の玄室天井高は熊本県の大野窟古墳の横穴式石室(6.48 m)に次いで全国で第 2 位の高さを誇る。

これまでの調査では、明治 39 年(1906)の徳川頼倫による調査後、明治 40 年(1907)の大野雲外の調査が行われ、石梁・石柵をもつ特異な形態の横穴式石室が存在する古墳として知られた(大野 1907)。また、イギリス人 N. G マンローの著書(マンロー 1908『prehistoric japan』)にも石室実測図が掲載されている。

昭和 39 年(1964)には、和歌山市教育委員会の委嘱を受けた関西大学により、測量調査と横穴式石室と墳丘南側を中心とした発掘調査が行われている(関西大学 1967)。

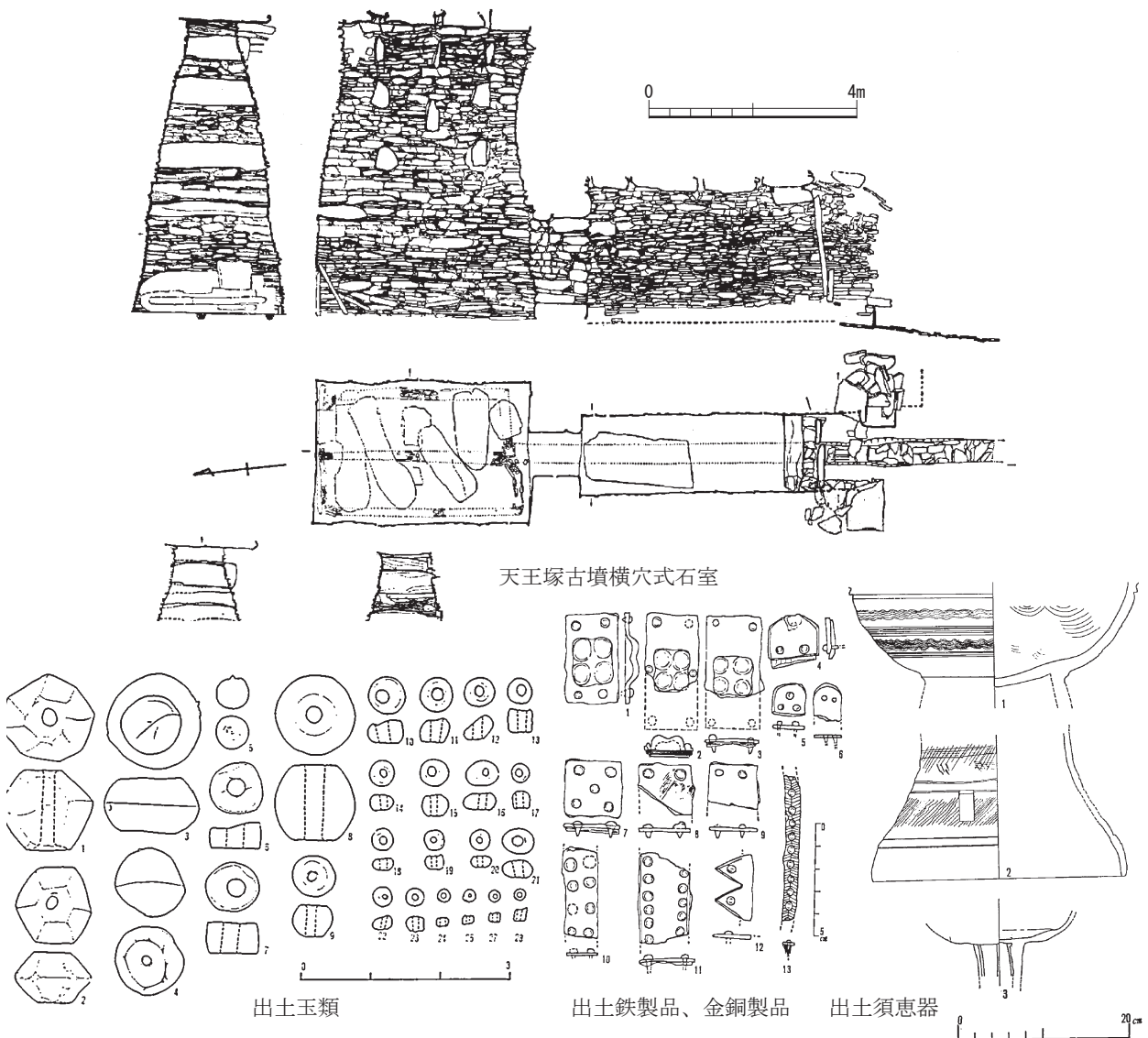


図 2 昭和 39 年天王塚古墳の調査成果 (関西大学 1967 より)

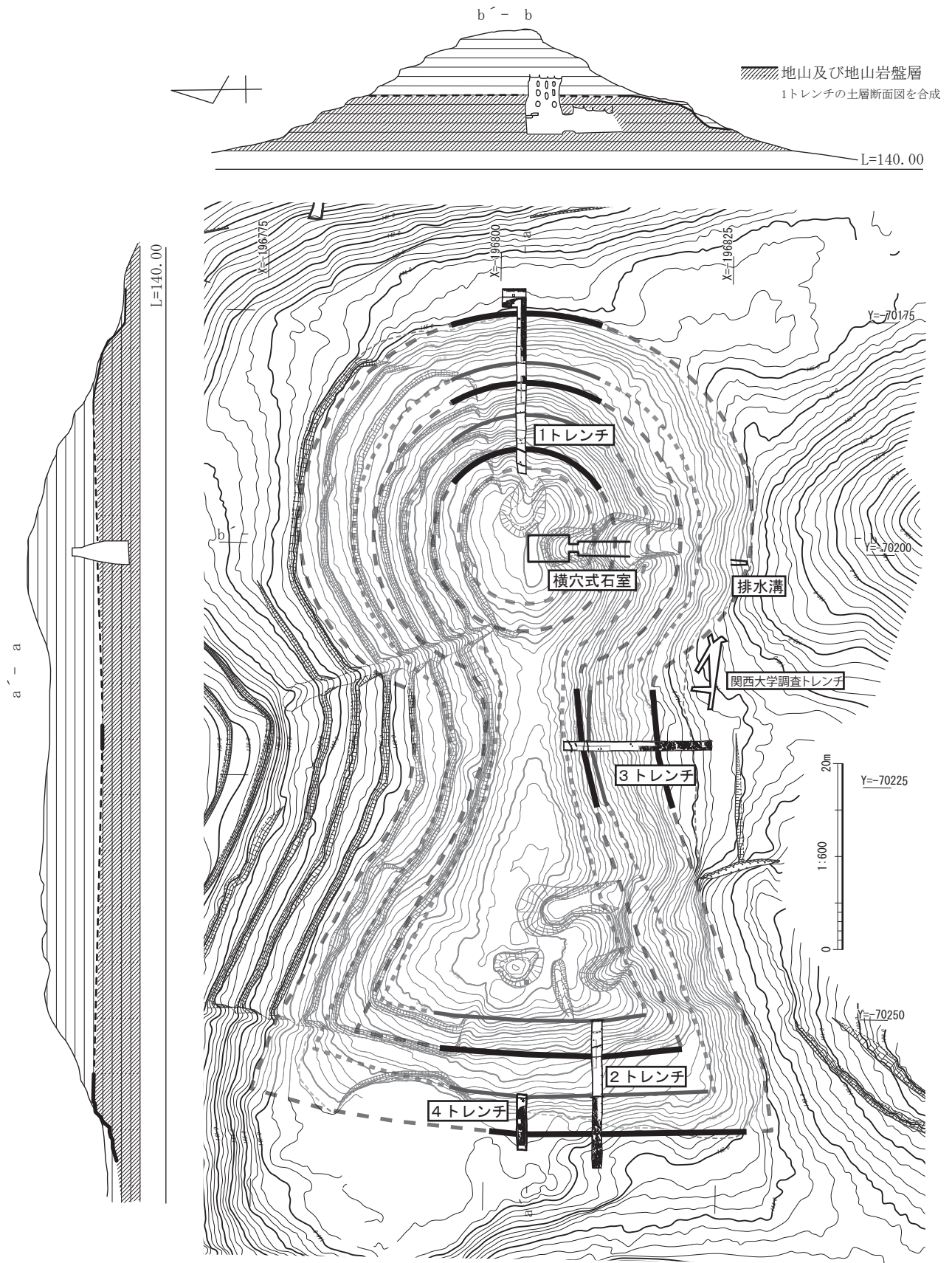


図3 天王塚古墳墳丘復元図 (S=1/600)

この調査では、羨道部から土師器壺・直弧文が描かれた漆膜が出土しているほか、石室内の石棚上から小玉 20 点・金銅製飾り金具・鉄鏃・小札が、玄室と羨道からは須恵器の器台・壺・坏、玉類（銀製空玉・ガラス小玉・瑪瑙切子玉・琥珀小玉・滑石白玉）、金銅製金具等が出土し、南くびれ部からは須恵器の甕・器台・高坏が出土している。石室が長い間、開口していたことから盗掘が行われている可能性が高いが、断片的な遺物から本来は石室内に豊富な副葬品が存在したとみられる。

3. 新たに判明した天王塚古墳の内容

墳丘の規模と復元 今回の測量調査及び発掘調査により、後円部、前方部及びくびれ部の墳丘裾を確認した。調査成果から天王塚古墳は墳長 88.0 m の前方後円墳であり、岩橋千塚古墳群中における最大規模の前方後円墳として位置づけられる。

後円部の規模は、高さ 10.1 m、直径 44.0 ～ 48.0 m に復元できる。玄室の高さ約 5.9 m の横穴式石室を内部主体に持つため、後円部は腰高な立面形を示す。後円部の段築は、1 段目斜面並びにテラス及び 2 段目斜面を確認した。2 段目以上については、今後の調査によって明らかにすべきだが、後円部では 2 段以上の段築を有すると考えられる。

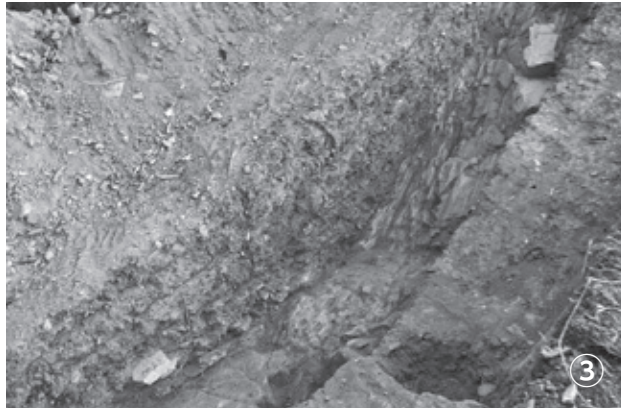
前方部の規模は、高さ約 7.0 m、前方部の幅は現状で約 54.0 m、復元すると約 56.4 m と推定される。前方部の段築は、1 段目斜面並びにテラス及び 2 段目斜面を確認し、前方部は 2 段築成となる。前方部の 1 段目テラスは、後円部の 1 段目テラスよりも約 0.5 m 高く位置する。一方、くびれ部は、高さ 4.5 m、3 トレンチ付近では前方部の幅は約 26.4 m に復元できる。くびれ部の段築は、発掘調査では約 0.7 m の平坦面を確認したが、1 段目テラスとなるか確定的ではない。現況では、くびれ部付近では前方部幅が狭くなるため、後円部や前方部で確認されたテラスと同様の幅を確保するのは難しい。前方部側面の段築については今後の検討課題としたい。

また、今回の発掘調査では、葺石並びに埴輪列等の外表施設、造出、基壇及び周濠については確認されていない。

墳丘の構造と石室の構築 墳丘は、1 段目テラスまでを地山（第 5 層）及び地山岩盤層（第 6 層）を削り出しにより、2 段目以上を盛土により墳丘を築造する。後円部では断割り調査から 1 段目テラスを境に地山が水平に堆積し、墳丘中心部へと入りこむ状況が確認された。後円部及び前方部では、おおむね標高約 148.0 m 付近まで地山岩盤層が存在する。

昭和 39 年の横穴式石室の調査においても横穴式石室は地山及び地山岩盤層を掘り込んで築造されていることが明らかとなっており、今回明らかとなった後円部の墳丘構造と横穴式石室の構造を比較すると、玄室の石梁中央付近までは、地山及び地山岩盤層を掘り込む事により石室が構築されたとみられ、石室の上半のみが盛土により構築されたと考えられる。このように天王塚古墳は、1 段目墳丘の大半を地山及び地山岩盤層を削り出して築造しており、盛土による構築は全体の 1/3 の程度とみられる。

古墳の築かれた時期 古墳に伴う出土遺物が少なく、古墳の築造時期を判断する資料は得られていない。既往の調査により出土した遺物から、天王塚古墳の時期は T K 10 ～ M T 85 型式期と考えられる。横穴式石室の編年観からも大日山 35 号墳、大谷山 22 号墳より後出する要素が認められ、現状では古墳時代後期中葉（6 世紀中葉）とするのが妥当といえる。



1：天王塚古墳全景、2：1トレンチ（後円部）全景、3：1トレンチ1段目墳丘盛土、4：3トレンチ（くびれ部）全景
5：2トレンチ（前方部）2段目墳丘、6：2トレンチ・4トレンチ（前方部）全景、7：1トレンチ1段目地山

写真1 天王塚古墳調査写真

4. まとめ—甦える天王塚古墳—

岩橋千塚古墳群では、大日山 35 号墳、大谷山 22 号墳、井辺八幡山古墳と古墳時代後期前半から継続的に大型前方後円墳が築造され、その後に天王塚古墳が築かれる。天王塚古墳と先行するこれらの古墳では、石梁や石棚をもつ岩橋型石室を継続して内部主体に採用し、玄室高の増加に顕著に認められる石室規模の発達など、同一古墳群内で共通する要素が存在する。また、地山削り出しによる墳丘構築法についても同様の連続する要素としてとらえられる。しかし、今回の調査成果からは、埴輪の樹立をはじめとして、葺石、造出や基壇・周濠の有無など多くの点で先行する古墳とは内容が異なり断絶する要素が多く存在することが明らかとなった。こうした点から、天王塚古墳は、近畿地方中央部で更新された新たな古墳祭祀や古墳築造に係る情報を入手しつつ築造されたと考えられ、古墳築造に係る被葬者の性格を示すものとして特筆される。

発掘調査の成果については平成 27 年 10 月に現地説明会を行い、251 名もの参加者を得ることができた。多くの人々が訪れた現地説明会の風景は、天王塚古墳が地域の誇りと復活への期待にあふれたシンボルであることを如実に示したといえる。まさにそれは約半世紀前の現地説明会でも同じであり、天王塚古墳が往時の姿へと甦る一步を踏み出す瞬間となった。

そして調査完了後、平成 28 年 6 月 17 日には天王塚古墳は大谷山 22 号墳とともに国の特別史跡に追加指定されるよう国文化審議会より答申がなされた。約半世紀の時を経てようやく甦った天王塚古墳であるが、今後の整備と石室の公開に向けて、地域と一丸となってその保護を行い次代にもその価値を引き継ぎたい。



1：天王塚古墳から大谷山を望む、2：平成 27 年度現地説明会風景、3：昭和 39 年現地説明会風景

写真 2 天王塚古墳調査写真

地として周知されるようになった。大池遺跡の周辺では、紀の川市の平池北岸一帯に広がる平池遺跡において、サヌカイト製のナイフ形石器や細石刃及び細石刃石核が出土している。また、尺谷池北岸を中心に立地する尺谷池遺跡でもナイフ形石器が出土しており、本遺跡周辺には旧石器時代後期の遺跡が数多く確認されており遺物が表採されている。

2. 大池遺跡の調査

今回の調査は、大池南岸の緩斜面地において地層確認と遺物の出土層位やその時期を把握することを目的として確認調査を実施した後、本発掘調査を行った（第2図）。以下、調査の概要を述べる。なお、現在整理作業中のため、その結果によって今回の見解が変更される場合もある。

・基本層序

大池遺跡が立地する緩斜面地には、岩盤である結晶片岩が長年風雨にさらされた結果、風化し、細かく砕かれて流れ下った礫や砂などが地層となって堆積している。これらの堆積物は、雨や風によって上部から少しずつゆっくりと斜面地を流れ落ちて堆積したものである。このような堆積環境



第2図 調査区位置図

では、地層の境が不明瞭であり、沖積低地でみられる洪水による氾濫堆積物で覆われた旧地表面や、人為的な地形改変による地層削平面など、発掘調査の指標となる遺構検出面の把握が困難である。今回の調査地のような山間部における斜面地では、土砂崩れや火山灰の降灰などによって旧地表面が覆われることで地層の境を明瞭に観察できる場合もあるが、長期的な気候変動に影響された基盤岩風化の進行速度変化、母岩となる岩質の変化、また土壌の生成と土中に含まれる鉱物の溶解などが少しずつ性質の異なる堆積物を生成し、これが地層の違いとして認識されると考える。

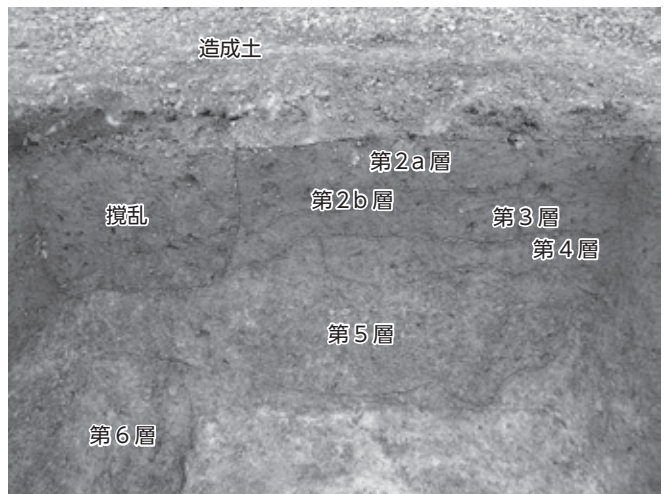


写真2 大池遺跡の地層断面（確認調査区）

大池遺跡の地層について説明する。現地表面を形成する造成土下には、大池遊園開園時の整地土及びその下部に古土壌（第1a・b層）が堆積している。

調査対象である第2層は、大きく2単位（第2a・b層）に細分でき、場所によっては4単位（第2a～d層）に細分できる（写真2）。第2a層は、明黄褐色の礫混中粒シルトで石英の角礫を含む。層厚は8～15cmを測る。また第2b層は、やや暗色化する明黄褐色から黄褐色の礫混中粒シルトの古土壌層であり、第2a層と比較し石英の角礫を多く含む。層厚は5～15cmである。この第2b層は古土壌であるため、その上面は旧地表面が遺存していると考えられる。よってその上位に堆積する第2a層は、堆積環境に何らかの変化があったことを示している。これら第2層は、植物の根や土中の生物によって著しく擾乱されていた。第2層からの出土遺物は、サヌカイト製石鏃の他、多数のサヌカイト剥片、砂岩製叩石が出土している。

第3層は、明黄褐色の礫混粗粒シルトであり、石英の角礫を含む。層厚は15cm以下である。この第3層からは、サヌカイト剥片が少量出土した。

第4層は、明期褐色を主体とし、赤褐色や褐灰色が斑状に混じる礫混シルトであり、層厚は30～50cmである。第5層は、明黄褐色から黄橙色の斑状を呈する礫混粘土であり角礫を含む。層厚は15～30cmである。第6層は灰白色の粘土混シルトであり、層厚は5～40cmである。この第6層は北側（大池側）に厚く堆積するもので、土質から湿地堆積物と考えられる。これら第4層以下については、確認調査の第4層からサヌカイト剥片がごく少量出土したものの、本発掘調査では遺物が出土していない。確認調査第4層出土の遺物については、現段階では生物擾乱による第3層からの混入遺物と考えている。

・遺物出土状況

今回の調査では、上述した調査地の地層堆積環境を考慮し、第2層以下の地層については人力により薄く剥ぐように慎重に掘り下げを行った。特に、調査の目的が各地層内における微細なサヌカイト製の石器及び石器製作に関わる剥片の広がり把握することにあるため、検出した石器及び石器石材の記録には、検出地点を明確にするため竹串や小旗を立て目印とする他、1点ごとに測量機器による位置情報や標高を記録し、出土状況の近接写真撮影も行った。



写真3 確認調査第2a層遺物出土状況1



写真4 確認調査第2a層遺物出土状況2



写真5 確認調査サヌカイト製石鏃出土状況



写真6 確認調査砂岩製叩石出土状況



写真7 本発掘調査調査区全景(南から)



写真8 本発掘調査遺物出土状況(東から)

確認調査では、主に第2a層中の石器及び石器石材の出土状況について記録を作成した。その結果、明瞭な石器及び石器石材の集中箇所は検出できなかったものの、縄文時代早期とみられるサヌカイト製石鏃の他、サヌカイト剥片、砂岩製叩石などが出土している。また、下層確認のための深掘調査区では、第3層からサヌカイト剥片が少量出土している(写真3～6)。

本発掘調査では、第2a～3層中の石器及び石器石材について調査を行った(写真7・8)。その結果、明瞭な石器及び石器石材の集中箇所を確認することはできなかったものの、第3層からサヌカイト剥片、第2d層以上からサヌカイト製石鏃とクサビ剥片の他、第2b層以上からサヌカイト製の石器及び石器石材とともに砂岩製の叩石が出土している。また、第2a層から、凸基有茎式

石鏃の中茎とみられるもののかなり大型のものとなることから、旧石器時代後期の有茎尖頭器の可能性のある資料も出土している。

・出土遺物の特徴

確認調査及び本発掘調査において出土しているサヌカイト剥片については、打点周辺の形状が口唇状（リップ）を呈するもの、また打瘤（バルブ）が認められるものがある。これは前者が軟質ハンマー、後者が硬質ハンマーを使用した結果形成される打痕周辺の剥離面の形状であることが指摘されている。これらの剥離技術の多様性は、本遺跡が石器製作場所であったことを示唆するものと言えよう。また、本発掘調査において出土しているクサビ剥片は、旧石器時代から弥生時代まで長期にわたりみられるものであり、相対する二方向から剥離痕跡をもつものである。全体の形状は、平行する二辺を持つ台形状となる。このクサビ剥片の用途については不明な部分が多い。今後、報告書作成に向けて整理作業を行い詳細な分析を行いたいと考えている。

3. 火山灰考古学

大池遺跡では、明確な火山灰層は検出できていない。しかしながら、確認調査において第3層に火山ガラスが含まれていることが明らかとなった。よって、地層の堆積年代と包含される石器の年代を絞り込む目的で、火山ガラスの産地同定とその噴出時期の特定を公益財団法人大阪文化財研究所に協力を依頼した。

明確な火山灰層が確認できない場合、その降灰層準を特定するために、各地層中に含まれる火山ガラスの増減を調べ最も多い層準を降灰層準とする。分析結果では、第3層堆積中もしくは第3層堆積後に、また第2a層堆積中もしくは堆積後の2つの降灰層準が認められた。

それではその降灰時期はいつなのか。これについては、火山ガラスの形態的特徴や屈折率を測定比較することで当該火山灰を噴出した噴出源を特定し、その噴出・降灰時期を推定することができる。大池遺跡の火山ガラスは、そのほとんどすべてが扁平型である（写真9）。旧石器時代後期から縄文時代にかけて、近畿地方中央部で確認される火山灰層のなかで、扁平型火山ガラスを豊富に含むものは平安神宮火山灰層と横大路火山灰層である。これらは前者が始良 Tn 火山灰（AT）、後者が鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）とされる（第3・4図）。火山ガラスの屈折率の測定及び比較は、残念ながら大池遺跡では火山ガラスが純粋な火山灰層ではなく、地層中に含まれる二次的な資料であることから、風化が進み良好な結果が得られていない。しかしながら、これらのマイナス要素を補正し判断すると、第3層堆積中もしくは第3層堆積後に降灰層準が求められる火山ガラスは平安神宮火山灰層に対比でき、一方第2a層堆積中か堆積後に降灰層準が想定される火山ガラスは横大路火山灰層に対比できると考えられる。そして、その降灰時期から得られる地層の堆積年代は、第3層が約3万年前を前後する頃であり、第2a層が7,300年前ごろかそれ以前と考えられる。

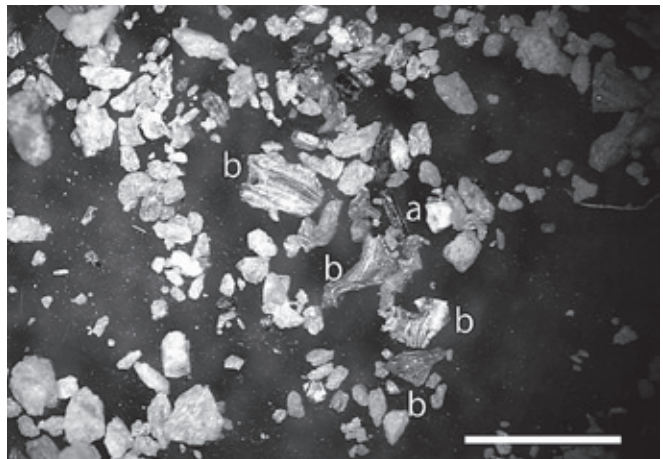


写真9 大池遺跡出土火山ガラス（a.角閃石・b.火山ガラス）

4. まとめ

和歌山県内における旧石器時代後期から縄文時代草創期の遺跡は、中原正光によって2010年段階で52遺跡がリストアップされている。これらのうち、発掘調査が行われている遺跡は、1979年に『打田町史』の編さんに伴い発掘調査されサヌカイト製ナイフ形石器などが出土した紀の川市の堂坂遺跡、1978・1979年に調査され、グレーチャートまたは頁岩製の剥片石刃が出土した御坊市尾ノ崎遺跡、1981年に発掘調査され、縦長剥片に細部加工を施した頁岩製の初期ナイフ形状石器などが出土した日高川町の古垣内（高津尾）遺跡の他、1983・1985年に町道建設に伴い範囲確認調査（第1次）とその後の本発掘調査（第2次）が行われた有田川町の土生池遺跡、さらに1985年以降、湯浅御坊道路及びその周辺道路の整備建設に伴う発掘調査が行われた有田川町の野田・藤並地区遺跡の5遺跡のみである。そのうち土生池遺跡では、落ち込み状遺構や溝状遺構からサヌカイト及び頁岩製のナイフ形石器やスクレイパー、石核など一括性の高い石器群が出土している。また野田・藤並地区遺跡では、自然流路と考えられている溝状遺構や落ち込み状遺構から、サヌカイトや頁岩製のナイフ形石器やスクレイパー、有舌尖頭器、石鏃などが出土している。和歌山県内における旧石器時代から縄文時代早期にかけての遺跡の発掘調査は、大池遺跡が6例目となる。

火山灰考古学によって得られた各地層の時期は、第3層が旧石器時代後期、第2b層が旧石器時代後期末から縄文時代草創期、第2a層が縄文時代早期となる。

よって、調査地周辺で表採されている旧石器時代後期から縄文時代にかけての石器及び石器石材は、第2～3層が後世の削平または攪乱により露出した箇所採取された可能性がある。

※本文中において使用している挿図及び写真については、未報告資料であるためすべて不許転載とします。

参考文献

- 鈴木道之助 1991「ピエス・エスキュー（楔形石器）」『図録・石器入門辞典〈縄文〉』
 中原正光 2011「日本旧石器時代遺跡データベース（2010）について」『紀伊考古学研究 第14号』紀伊考古学研究会
 町田洋・新井房夫編 2003『新編 火山灰アトラス「日本列島とその周辺」』東京大学出版

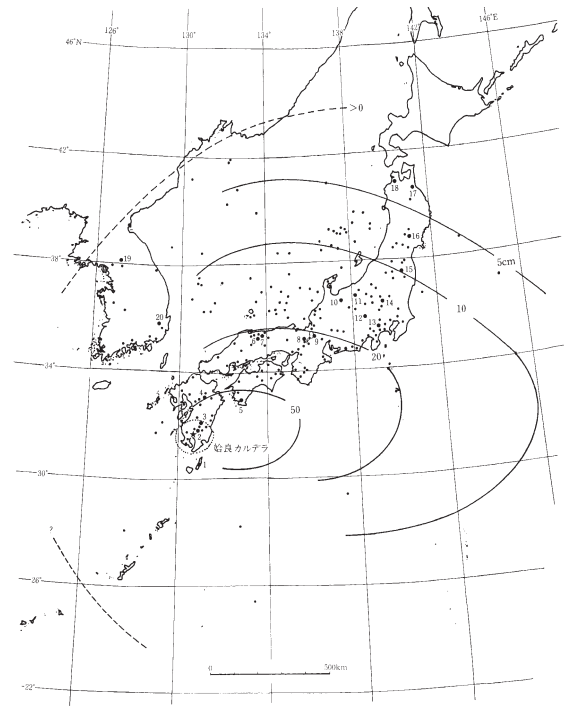


図 2.1-6 始良 Tn 火山灰 (AT) の等層厚線図と主な産出地点。
 点線内は入戸火砕流堆積物 (A-ho) の分布範囲を示す。
 模式地：1. 中種子町野畑, 2. 額分市白蔵原, 3. 小林市南原町, 4. 夜明桜町, 5. 宿毛市小川, 6. 八東村花園, 7. 関金町安歩, 8. 京都市大原, 9. 彦根市大塚, 10. 立山町千垣, 11. 妙高高原町笹ヶ峰, 12. 川上村野辺山, 13. 美野市ヤビツ峠北, 14. 前橋市上畑井, 15. 二本松市湯温泉, 16. 雫子町川渡, 17. 八戸市多賀台, 18. 木造町出来尾, 19. 全谷里, 20. 古乳里。
 [Machida & Arai (1983) を改訂, ほかに河合 (2001) は主に陸上資料から描いている]

第3図 始良 Tn 火山灰分布図

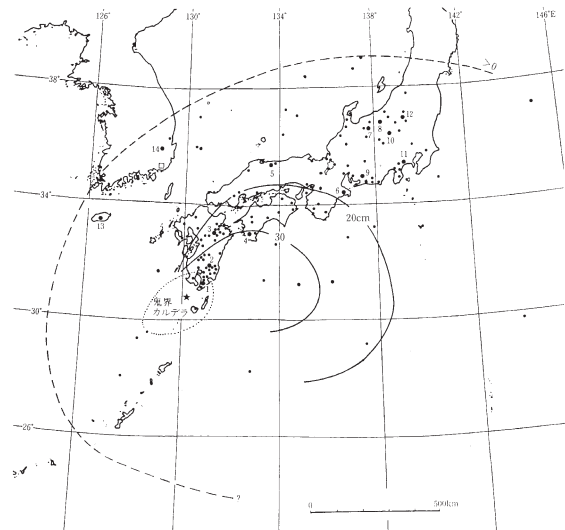


図 2.1-2 鬼界アカホヤ火山灰 (K-Ah) の等層厚線図と主な産出地点。
 点線内は火砕流堆積物 (K-Ky) の分布範囲を示す。
 模式地 (大きな黒丸)：1. 垂水市福切, 2. 霧島町永池, 3. 久住町一帯, 4. 前毛市小川, 5. 関金町鴨ヶ丘, 6. 大台町藤原, 7. 立山町弥生ヶ原, 8. 妙高町大久保, 9. 作手村大野原, 10. 軽井沢町成沢, 11. 二宮町野切川原谷原下, 12. 尾崎ヶ原, 13. 西峰浦, 14. 古乳里。
 [Machida & Arai (1983) を改訂]

第4図 鬼界アカホヤ火山灰分布図

中世荘園の再開発拠点？

—和歌山市 寺内古墳群、相方遺跡—

(公財)和歌山県文化財センター 村田 弘

1. はじめに

西日本道路株式会社関西支社和歌山工事事務所より和歌山南スマート IC 建設事業が、和歌山県により和歌山橋本線道路改良工事が計画され、その予定地の一部が周知の埋蔵文化財包蔵地である「寺内古墳群（187）」に該当した。

このため和歌山県教育委員会が試掘確認調査を実施したところ、事業対象地には、埋蔵文化財が展開する可能性が高いものと考えられ、記録保存目的の本発掘調査が必要と判断されるに至った。なお、試掘確認調査では古墳は確認されず、土坑・柱穴・溝を中心とした遺構で構成される集落遺跡である可能性が高いと思われる状況であったため、従来周知の埋蔵文化財包蔵地である「寺内古墳群」として把握している範囲については、種別を「散布地」として把握し、新たに「相方（そうかた）遺跡」として認定、登録することになった。

これを受け、和歌山県（海草振興局建設部）及びネクスコ西日本和歌山工事事務所は、工事に先立ち、本発掘調査を公益財団法人和歌山県文化財センターに委託した。本発掘調査は平成 27 年 12 月 14 日に着手し、平成 28 年 3 月 16 日に現地での調査を完了した。



図1 調査地点と周辺の遺跡

2. 位置及び周辺の環境と歴史

寺内古墳群は、和歌山市の東南部、寺内・森小手穂・吉礼に所在する。地形的には、岩橋山塊の南斜面、岩橋前山古墳群の南に派生する支脈及び大日山の南山麓部に広がる。東西 1km、南北 1.5km の範囲で、南に開く開析谷である総綱寺谷がある。

当古墳群は、東の岩橋前山南斜面裾にある円墳 11 基余り、西の大日山南斜面の支脈にある前方後円墳 1 基と円墳 7 基余、両者の中央を中心とした一帯に散在する 33 基からなる。寺内古墳群のうち、粘土槨を有する 63 号墳は、円墳ながら径 21 m を測る大きなもので、花山古墳群との比較や西の支脈にある井辺古墳群との関連が検討されるべき古墳と言われている。

相方遺跡は、前述したように今回の調査に先立ち実施された試掘確認調査により発見され、新規認定された遺跡で、その範囲は南北 150 m、東西 100 m ほどの丘陵裾部に展開する古墳時代から中世にかけての散布地と考えられる遺跡である。

この相方遺跡の西側に接するように、南流する幅 1.5 m ほどのコンクリート製の農業用水が所在しているが、この用水の前身は、宮井（みやゆ）新溝と呼ばれる古代末に開削された用水路である。開削主体は、当時の荘園領主であった日前宮であり、この地を含めた和田荘一帯の開発と安定化をはかったもので、その背後には東側に所在していた山東荘を所領する根来寺勢力への対抗があったと言われている。

周辺の遺跡としては、北方約 2km に全国屈指の古墳群として知られ、国の特別史跡ともなっている岩橋千塚古墳群が所在している。また、北東約 1.8km には、井辺前山古墳群が所在している。群中の井辺八幡山古墳は、全長 88 m を測る盟主的規模をもつ前方後円墳であり、くびれ部両側に造出しを設け、三段の円筒埴輪によって圍繞されている。この造出し部より出土した埴輪は、顔に入墨をした人物埴輪や力士などの特徴のある人物埴輪のほか、器材埴輪・動物埴輪など種類に富んでいる。なお、この井辺前山古墳群中の東支群の南西山麓には森小手穂埴輪窯跡があり、この窯で製作された埴輪が、同古墳群のほか周辺の古墳に供給されていたことが想定されている。



調査区遠景



1-2 区全景（北東から）

3. 調査

今回の調査区の南北及び東側は、丘陵の裾部に当たっており、わずかに西側のみが開けた谷間地となっている。西側の最も低い箇所(1区西端の耕作土上面)のT.Pは3.5 m、東側の最も高い箇所(3区の耕作土上面)ではT.P.6.5 mを測る。東側に向かってなだらかに上がっており、その比高差は3mほどである。

基本層序は、第1層が現代の耕作土、第2層がこれに伴う床土である。第3層は、にぶい黄色ないし黄灰色を呈するシルト層で、量的には少ないが中世の遺物を含む包含層である。この層については、中世の開発に伴う時期のものである可能性が高い。第4層は、灰褐色を呈するシルト質の土で、弥生時代から中世までの遺物包含層である。第5層は、明るい黄褐色を呈する土で、この付近の地山と考えられる層であり、この面において遺構が検出される。

なお、調査区については、土置場等の関係から下図のように3区に分けて行っている。

以下、各区の概要と主な遺構について記述する。

a. 1区の調査

1区は、南から迫り出す丘陵の末端部に当たる。また、西側は、先述した宮井新溝の後進と考えられる現有水路で限られる場所に相当する。

遺構 13：丘陵部の裾近くで検出されたもので、幅20cm前後、深さ7cm前後の溝状の遺構である。まっすぐ4mほど伸びたあと、両サイドでほぼ直角に屈曲して、コの字状になっている。北半部が後世の削平により消失してしまっているが、おそらく竪穴建物になる可能性が高いものと考えている。内側で一段落ちることから、ベッド状の構造であったことも考えている。時期については判然とし難いが平面プランから古墳時代以降のものと考えている。

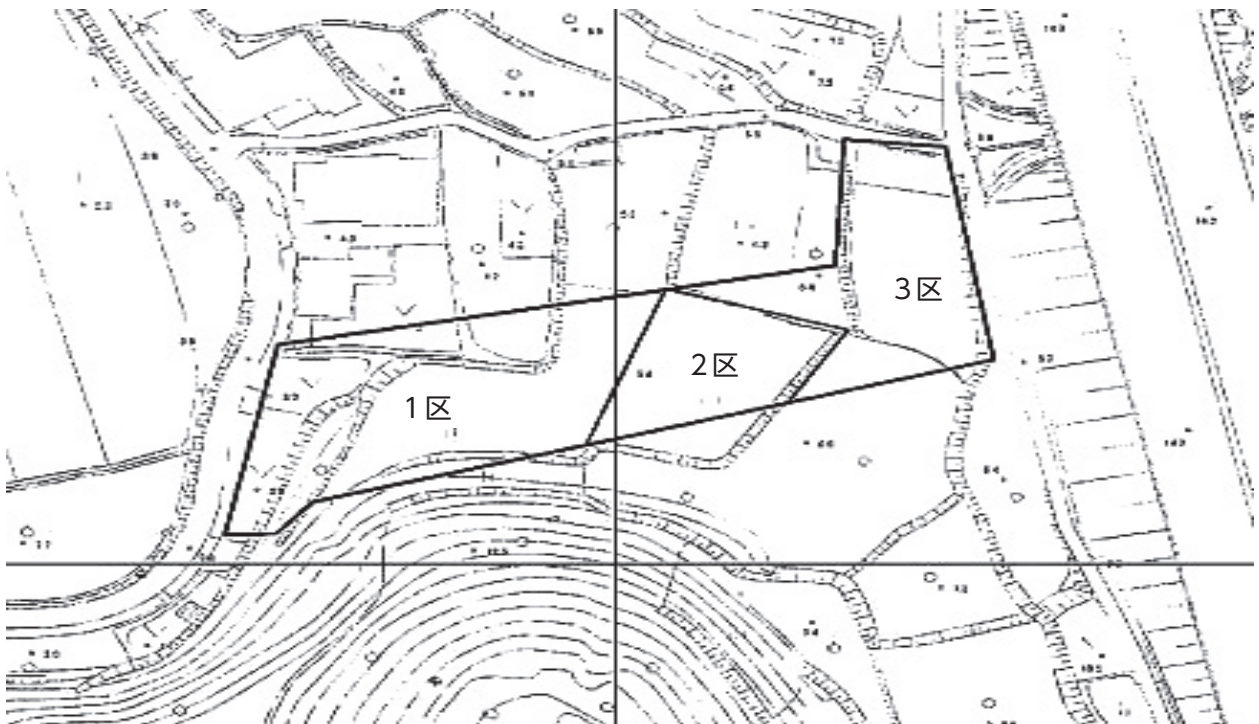


図2 調査区位置図



図3 寺内古墳群、相方遺跡遺構平面図

遺構 26：同じく丘陵部の裾近くで検出されたもので、前述の遺構 13 に比べてわずかに幅が狭く 15cm ほどで、深さも 5cm 前後と浅い。ほぼ直角に屈曲し、L 字状を呈する。この遺構についても、後世に削平された竪穴建物の残欠であったものと考えている。

遺構 6：幅約 50cm、深さ 40cm ほどの溝で、後述する遺構 7 の溝に取り付く。埋土は、3 層に分層できるが、いずれも明るい橙色を呈したシルト質の土で、水の滞留した痕跡、及びそれによる堆積は認められなかった。

遺構 7：最大幅 180cm、深さ 60cm ほどを測るしっかりとした溝である。この溝についても水の滞留した痕跡は認められなかった。おそらく丘陵の傾斜に直行して掘られており、傾斜度もあることがその主因と判断される。この溝の中から 12 世紀終わりから 13 世紀初めにかけての瓦器の皿が出土している。非常にしっかりと掘られていることから、中世段階には調査区外の南側丘陵部にこの溝を利用する何らかの施設が設けられていたことが想定されよう。



遺構 13 (西から)



遺構 6・7 (南から)

その他、遺構ではないが、1 区の西端部で自然地形の落ち込みが確認されている。おそらくこれが丘陵の末端部に相当し、これより西側は低湿地になっていたものと思われる。この落ち込み部から奈良時代に帰属する須恵器の壺や甕、土師器の高坏・竈などが比較的多く出土しており、注目に値する。また、調査区の南東から北西に向けて、自然地形の小さな谷が横断していることが判明した。この谷は、その堆積土から長い時間をかけ徐々に埋まっていき、中世段階には埋没したようで、弥生時代から中世までの土器が多数含まれていた。

b. 2 区の調査

2 区の大部分は、前述した谷部に相当する。4 - 2 層としている包含層下に遺構面が確認されたため、この 2 区については、上下 2 面の調査を実施している。ただし、上面の遺構密度は低く、土坑・溝などの遺構をわずかに検出したにすぎなかった。

遺構 206：前述した谷部の南東肩に沿う溝で、幅 70cm 前後、深さは 40cm ほどを測る。途中から現代の溝に切られて、消失してしまうが、逆に言えば現代の溝がこの溝を踏襲して掘られている可能性が高く、その場合南側から張り出している丘陵の末端部を迂回するようにして流れ、低湿地へと排水していた可能性が高い。出土遺物から中世に帰属する時期のものと考えられ、この時期この部分には、宮井新溝といわれる用水路が開削されていたわけで、あるいはその用水の補

完機能として、谷間の水を導入していたことも考えられよう。

遺構 209：幅 1.5 m、深さは最深部で 1.0 mほどと非常にしっかりとした溝である。埋設土の下層には水の滞留による青みを帯びた粘土質の土、灰色の砂の堆積が認められた。谷部の北東肩に沿って流れるもので、出土している遺物から、谷が埋没して以降、掘削された溝と考えられる。

この部分にも上層には現代の溝が流れており、地形的に谷筋の水を流すに最適の箇所であったと考えられよう。

遺構 228：径 80cm、深さ 20cm ほどの土坑である。この中からは、13 世紀前半代の土師器の皿、瓦器の椀・皿が出土している。こうした土坑が、溝 209 に接するような位置で数基検出されており、水にまつわる何らかの祭祀遺構の可能性も考えられよう。



遺構 209 (南東から)



遺構 228 土器出土

c. 3区の調査

3区は、今回の調査区のもっとも東側に相当し、その東端部は、高速道路の法尻に接している。ここでは、後述する竪穴建物、掘立柱建物などの遺構を検出しているが、東側になるにつれて遺構密度が低く、包含層も削られており、現在の耕作土直下が明るい黄色の地山となっていた。おそらく、高速道路建設に伴ってこの部分はかなりの削平を受けたものと考えられる。

遺構 368：幅 15cm 前後、深さも 5cm ほどと浅い。円弧を描く形状であることから、竪穴建物の壁溝と考えた。南半部は後世の削平により消滅してしまっているが、円弧の大きさから復元すれば 8 m ほどの規模を有していたものと判断される。この溝内から弥生時代後期の遺物が出土している。この竪穴建物の炉跡と考えられるものが遺構 372 としている土坑である。径 50cm 弱、深さは 20cm ほどであった。埋土に焼土と灰が混じっており、弥生時代の土器片も出土している。

この土坑の両サイドに径 20cm ほどの柱穴が検出されていることから韓半島に由来する「松菊里型」とよばれているタイプの建物になる可能性もある。



3区北東部 (南東から)

遺構 367：前述の 368 に平行して検出された遺構であるが、これについても竪穴建物の壁溝と判断している。幅は 15cm 前後で、深さは 5cm ほどと浅い。円弧の長さが短いため、その大きさについては判然としないが、7 m～8 mほどの大きさになるものと思っている。この遺構からも細片ではあるが、弥生時代後期と思われる土器が出土している。



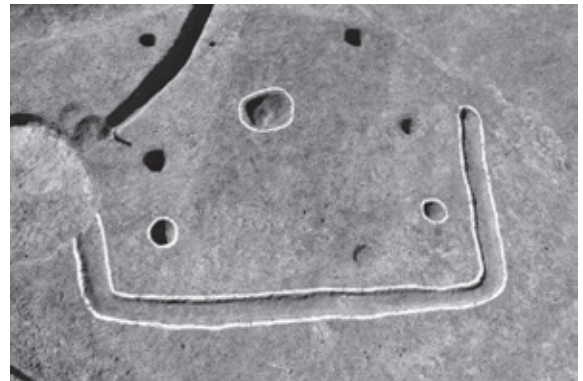
遺構 366・368 (西から)

遺構 366：方形の竪穴建物の壁溝と考えられる遺構である。幅は 20cm 前後、深さは 7cm 前後を測るもので、残っている北側の辺長から一辺 4.5 m に復元できる。出土遺物がないため時期を明瞭にし難いが、その形状から古墳時代に入ってからのものであると考えている。



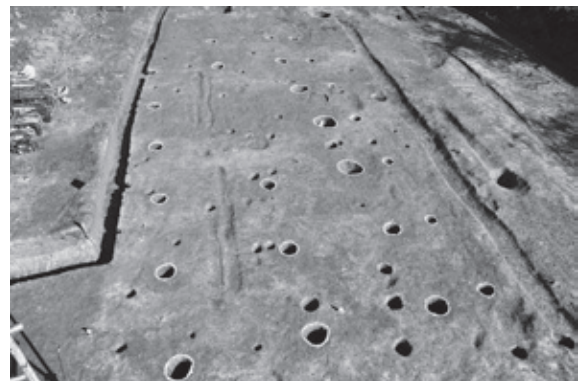
遺構 372 土器出土状況

遺構 303：一辺 3 m とやや小振りの方形の竪穴建物である。壁溝の幅は約 15cm、深さは 10cm ほどであった。中央近くで径 40cm ほどの炉跡が検出されている。この炉跡の周囲は熱を受け、赤く固まっていた。



遺構 303 (北東から)

遺構 437：東西 2 間、南北 6 間を測る掘立柱建物で、東側に半間の出の庇がつく。柱掘形の径は 40cm 前後で、深さは 30cm 前後を測る。柱間は、東西が 2.1 m、南北が 1.9 m を測る。南北列の両サイドの柱列が整然とした並びであるのに対して、中央の柱列がやや不揃いである。仔細に見れば、北側 1 間分と南側 1 間分の柱並びはしっかりとしており、かつ柱穴も深い。このことから建物の上部構造は入母屋ないし寄棟であったことが想像される。



3 区掘立柱建物 (南東から)

■ 4. ま と め

今回の調査は、寺内古墳群に含まれつつも古墳が所在する丘陵尾根部ではなく、丘陵部の比較的平坦面となっている箇所であり、事実上、新規に発見され登録された相方遺跡に帰属するものと言えよう。

この相方遺跡については、古墳時代から中世にかけての遺物散布地という認識であったが、今回の調査成果によって時代の幅が広まり、弥生時代後期から始まるもので、集落跡となる可能性が高いことが判明した。

出土した遺物の傾向から、長期にわたって継続する集落というよりは、単発的に出現し衰退を繰り返していたものと思われる。とくに奈良時代以降に 400 年近い空白が認められ、そのあと平安時代末ないし鎌倉時代初めに突如建物が出現し、遺物量も増加する。

この時期は、当該地の所領領主であった日前宮が、東側に所在していた根来寺領である山東荘の開発に対抗するため宮井新溝を開削するなどの時期に相当する。

今回見つかった建物が直接的にはどのような役割を担ったものかは不明だが、時期的なものを考慮すれば、こうした一連の動きと連動して生じた事象の可能性も考えられよう。

以上のほか、古代瓦や埴輪片が少量ながらも確認されているが、こうした遺物がこの集落とどのように結びつくのかなどは、現段階では不明といわざるを得ない。幸い、当該地付近については、今後も調査が実施される可能性が高く、その場合こうした課題を念頭において調査に当たる必要があるだろう。

住民との協働

—佐野寺跡の県史跡指定—

かつらぎ町教育委員会 和田大作

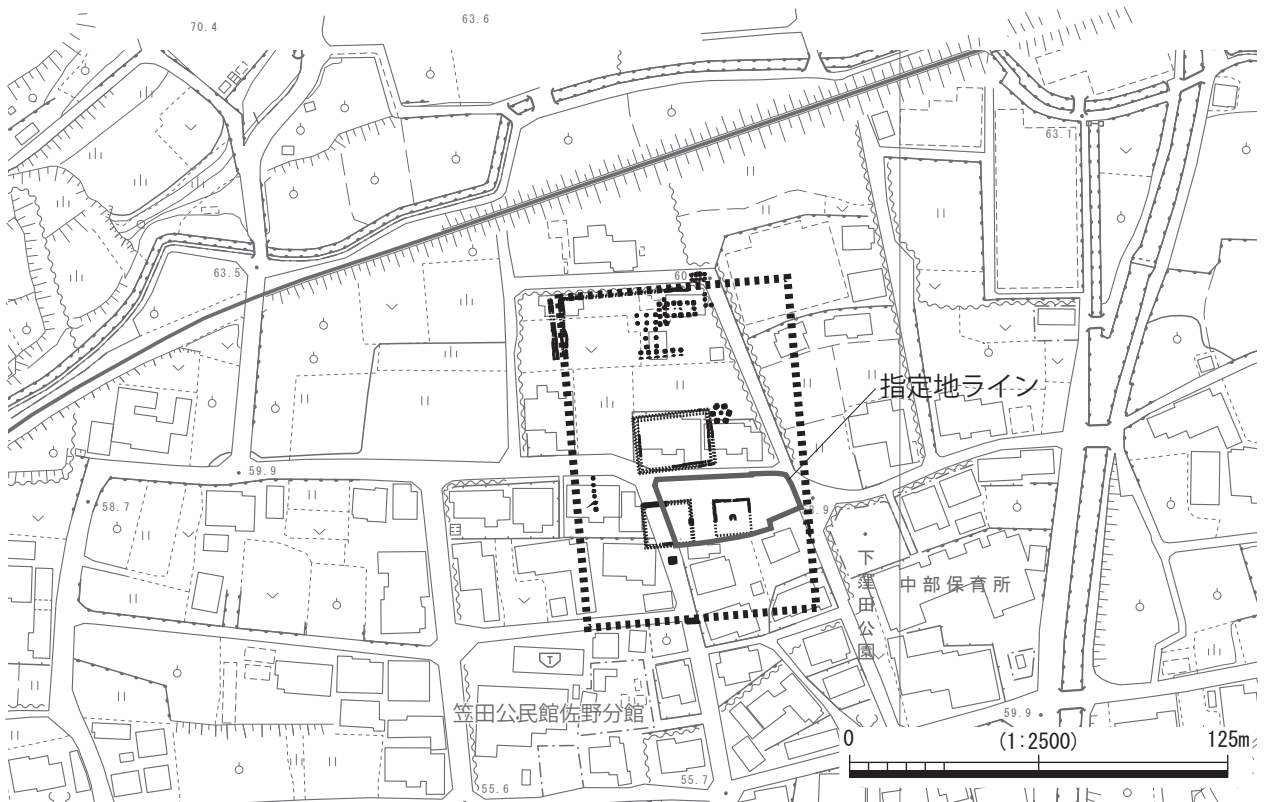
1. 同時にあった2つの相談—発掘調査の開始まで—

平成23年4月、かつらぎ町佐野540番1、同541番の2筆の土地について、不動産業者から分譲地造成を目的とした照会と相談があった。それから程なくして、地元住民から当該土地に眠る寺院遺構の保存について相談があった。後者についてはいわゆる保存運動となる内容であった。

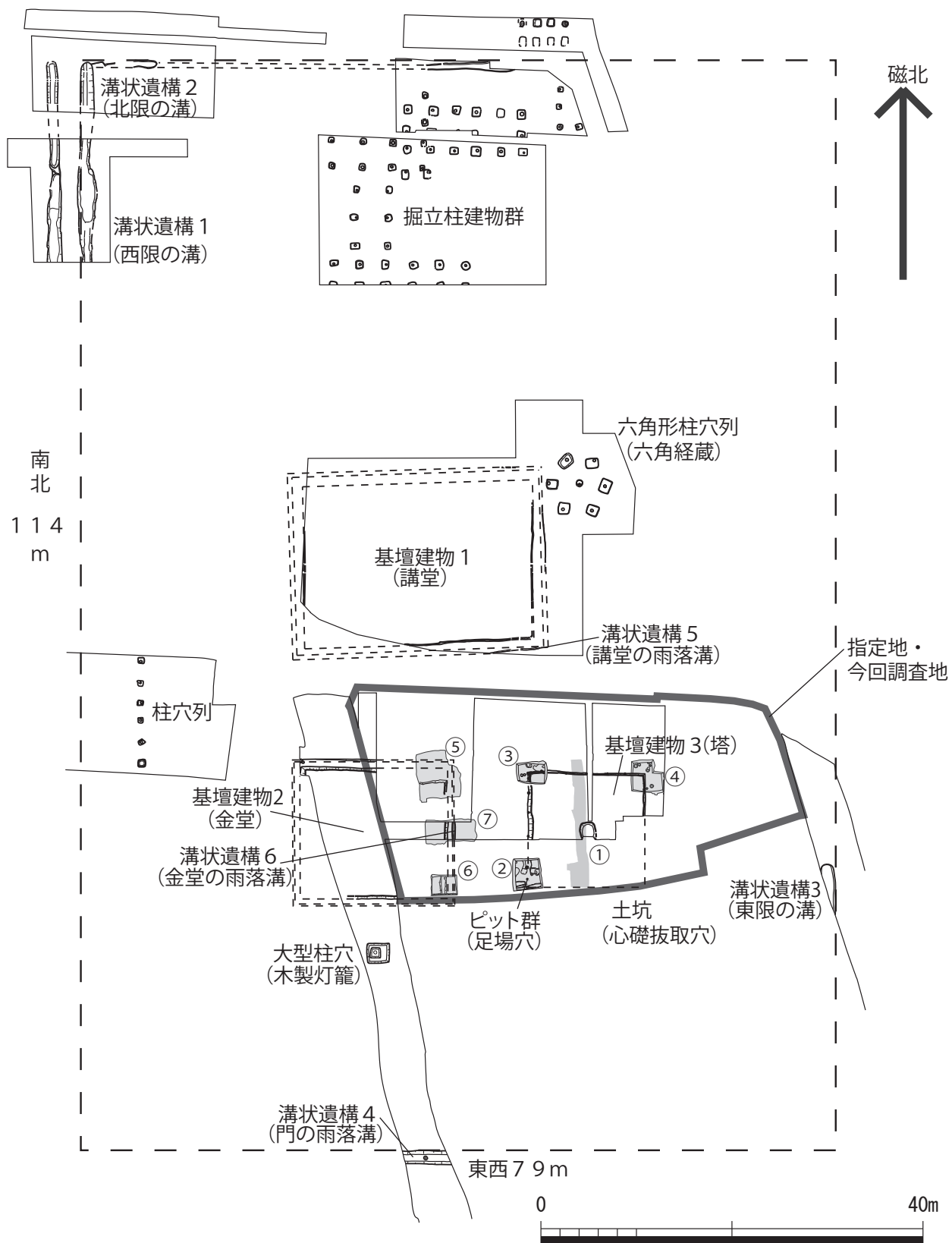
当該土地は周知の埋蔵文化財包蔵地「佐野廃寺」の範囲内にあり、土木工事を目的とした発掘の場合、着手60日までに届出を必要とすることが義務付けられている。文化財保護法第93条に書かれているこの内容と、先述した異なる目的の相談があった事実とを両相談者に伝えるのが、当時の筆者にとっては精一杯の対応であった。

しかし、佐野廃寺は、飛鳥時代後期の寺院跡で、法起寺式伽藍配置を有し、六角形堀立柱建物や大型柱穴など稀有な遺構のほか、寺域北側には堀立柱建物群が検出されている重要遺跡である。そこで、地元自治区からの要望もあり、学習会への協力や講演会の実施など、教育委員会として啓発活動を行った。その結果、町内部と土地所有者から一定の理解を得ることができ、平成25年3月に町史跡「佐野廃寺塔跡・金堂跡」に指定することができた。その後も土地所有者と交渉を重ね、同年11月には公有化を実現した。

公有化の実現見通しが立った平成25年8月、遺構の視認性に欠ける本史跡の整備を行うため、佐野廃寺塔跡・金堂跡整備委員会を設置した。整備委員会の審議に基づき、同年12月より整備を目的とした発掘調査を開始した。



第1図 佐野寺位置図 (S = 1/2500)



①……第1tr ②……第2tr ③……第3tr ④……第4tr ⑤……第5tr ⑥……第6tr ⑦……第7tr

第2図 佐野寺関係既往調査合成図 (S=1/600)

2. 調査内容

目的及びトレンチ調査の経過

塔跡及び金堂跡の規模の確定、座標位置の確定、基壇外装・基壇の構造の解明を目的として下記トレンチ調査を行った。

第1トレンチ 塔跡南辺の検出、旧調査区アゼの検出を目的として設定した南北に長い幅1m長さ13.5mのトレンチ。南端より掘り進め、旧調査区内で北辺を検出した後拡張を行ったものの、南辺の検出にはいたらず、擁壁下か史跡外にのびることが判明した。

第2～4トレンチ 塔跡南西(第2トレンチ)北西(第3トレンチ)北東(第4トレンチ)各角の検出、基壇外装・基壇の構造を目的として設定したトレンチ。第2トレンチについて当初1m×1mの規模で掘削を開始、その後拡張して基壇残存部その他遺構を検出したことにより、北西・北東角の位置を推定し、第3・4トレンチを2m×2mで設定した。第3・4トレンチでは、トレンチ拡張後に塔跡基壇北西・北東角を検出した。

第5・6トレンチ 塔跡の北辺を検出したことにより、金堂跡北東・南東角の位置を推定し、3m×3mで設定したトレンチ(第6トレンチについては、南方2m×東西3m)。第6トレンチでは、基壇上部がわずかしか残存せず、あた、史跡外へのびることが判明した。第5トレンチでは、北辺・東辺の検出により、金堂跡北東角を確定した。

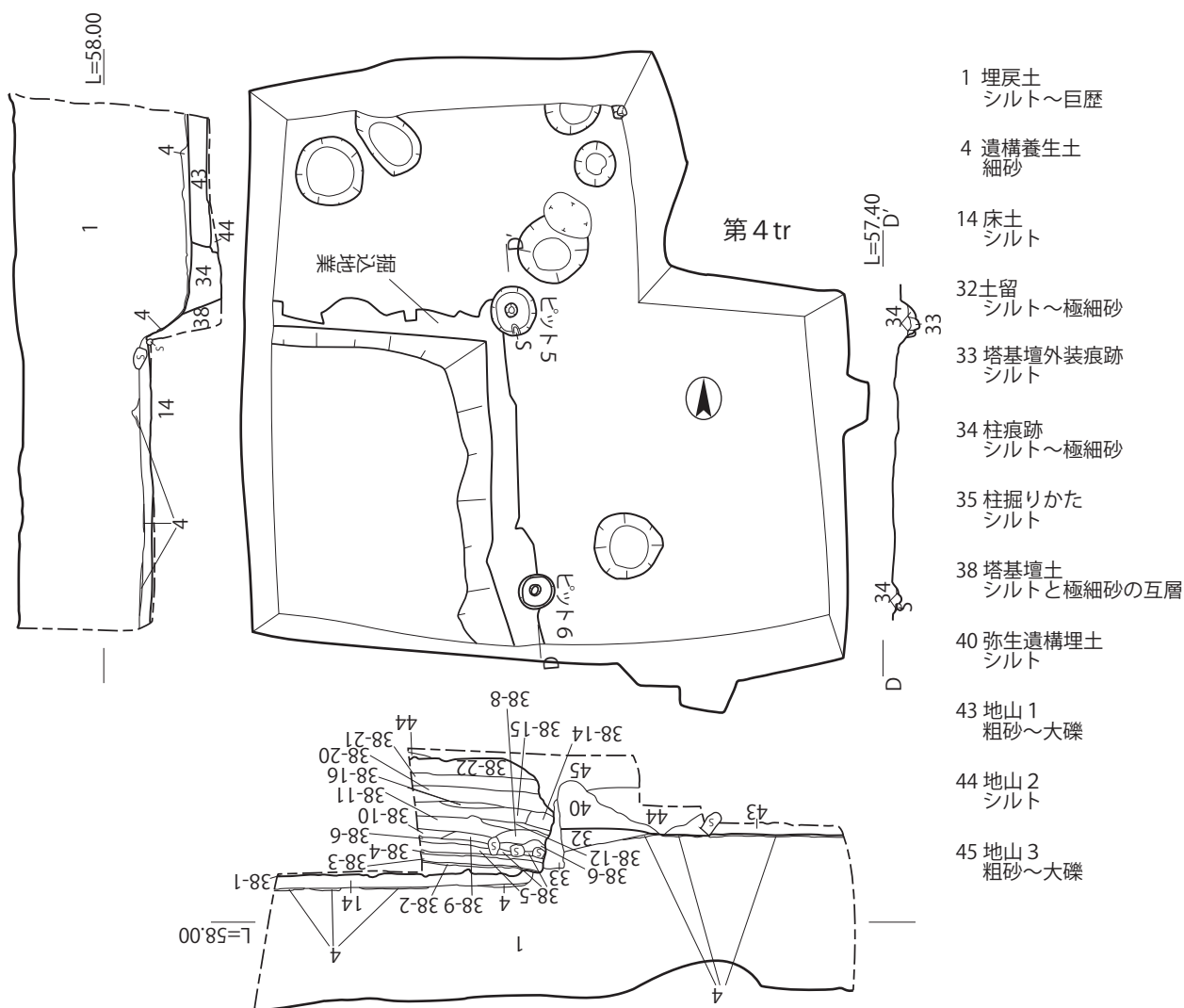
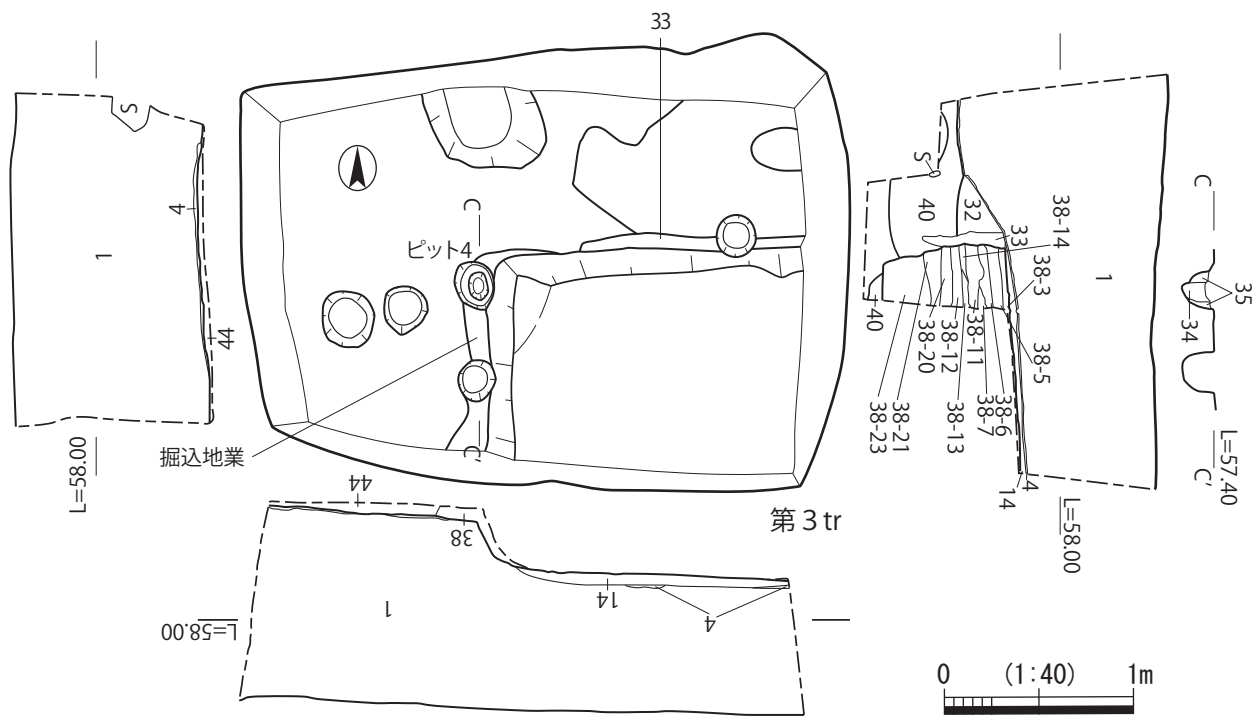
第7トレンチ 金堂北東角の位置を見極めるために、旧調査区で検出された基壇及び溝を再検出する目的で設定したトレンチ。基壇及び溝状の構造とつき合わせることで金堂跡北東角の位置を定めることができた。以上の経過後、第2～4トレンチにおいて精査を重ね、塔跡の掘込地業とそれを切るピットを検出した。その後段掘、半截後記録をとって完掘した。

最後に、塔跡北辺、西辺、東辺の確定及び基壇の構造の解明を目的として、第2トレンチ北壁・第3トレンチ東壁・第4トレンチ南壁にそれぞれ沿って基壇のタチワリを行った。その結果、第2・3において、基壇版築及び掘込業を断面で確認するとともに、基壇に沿った縦に長くのびるシルトが観察された。これにより再度第5トレンチの壁面観察、第7トレンチの平面精査・北壁観察を行ったが、同様の構造は確認されなかった。

層序と遺構・遺物

旧調査埋戻し以降の工場建築等現代的な行為を示す第1層、工場建築以前の耕作や、同時期に行われた土地整備あるいは土取行為等を示す第2～14層、旧耕作及び同時期に行われた土取行為を示す第15～28層、瓦廃棄等建築後の行為に関わると思われる第29～31層、整地や塔跡・金堂跡に関わる遺構の埋土その他の構造と考えられる第32層～第37層(うち第33層は木製外装痕跡)、塔基壇土第38層、金堂基壇土第39層、弥生時代の遺構あるいは包含層である第40～42層、砂礫とシルトの互層をなす地山の第43層～45層に大別できる。遺構面の高さは、概ねL=57.5mであるが、第5トレンチ西壁では、地山面の高さがL=57.7mと約20cm高く、金堂基壇土の下層から中層にかけて高さ調整を行っている様子が観察できた。塔基壇土については、掘込地業、版築、木製外装痕跡が確認された。金堂基壇土については、地山の上に版築が確認された。

遺構は、塔基壇が第1～4tr、金堂基壇が第5～7trで確認された。塔基壇周辺についてはピットが旧調査でも検出されていたが、第2～4トレンチで計6基が新たに検出された。旧調査概報では柱痕跡の有無はさまざまとされているが、今回検出した6基のうち5基は、柱痕跡が確認された。



- 1 埋戻土
シルト～巨歴
- 4 遺構養生土
細砂
- 14 床土
シルト
- 32 土留
シルト～極細砂
- 33 塔基壇外装痕跡
シルト
- 34 柱痕跡
シルト～極細砂
- 35 柱掘りかた
シルト
- 38 塔基壇土
シルトと極細砂の互層
- 40 弥生遺構埋土
シルト
- 43 地山 1
粗砂～大礫
- 44 地山 2
シルト
- 45 地山 3
粗砂～大礫

第3図 第3・4tr 平断面図 (S = 1/40)

いずれも基壇土に沿っており、掘込地業や基壇土を切る。また、溝と土坑が第2トレンチで検出された。溝は基壇土を切り、上記ピットに切られる。土坑埋土は瓦をまばらに含む。塔基壇の外装痕跡は、第3・4トレンチの一部で確認されている。

遺物については、第17層から本薬師寺式軒平瓦、第8～14層から凸面布目痕瓦、格子目タタキを有する瓦等が出土している。

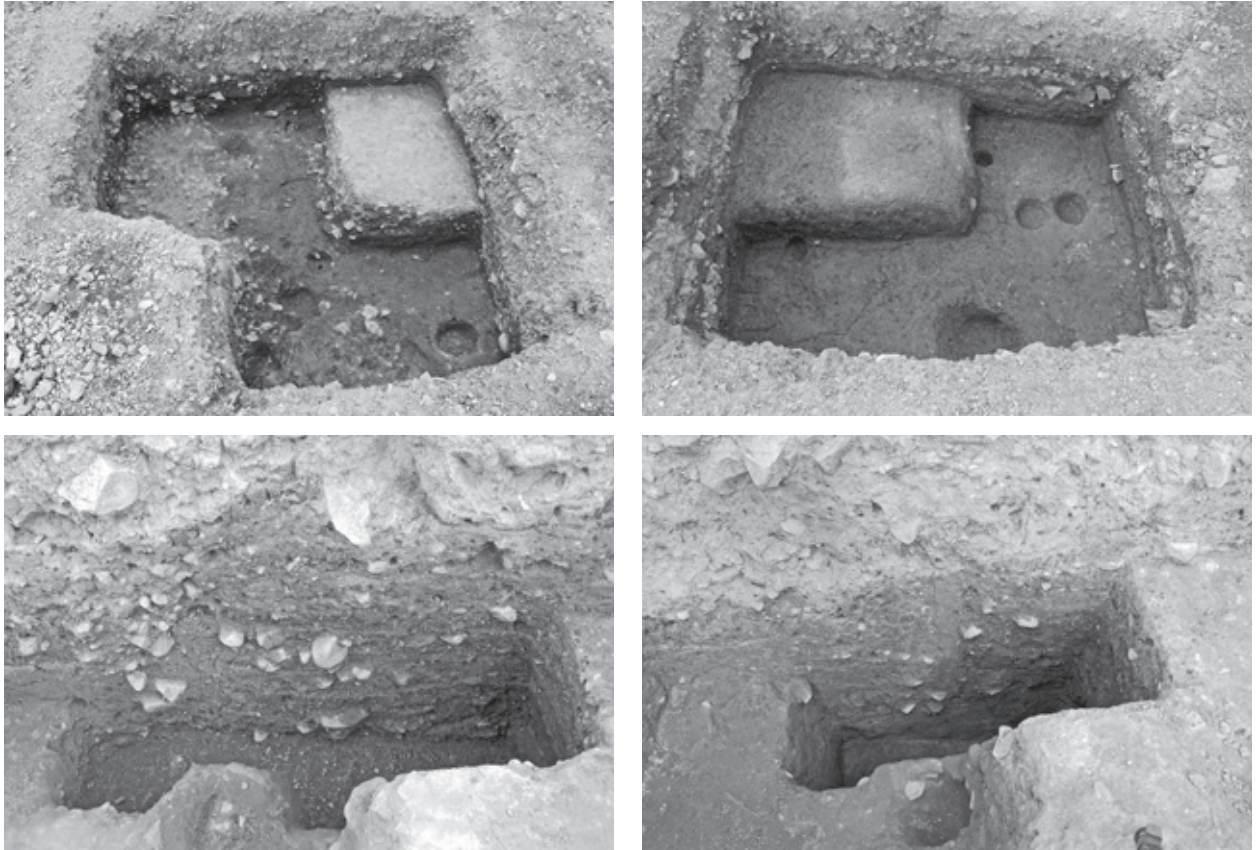


写真1 塔跡基壇北西角(左上)及び北東角(右上)再検出状況・同断ち割り(下)

3. 住民との協働

平成26年8月、現地説明会を行った。現地説明会には町役場の協働のまちづくり地域担当職員と、地元住民組織「佐野廃寺を考える会」会員がスタッフとして参画した。また、除草等の維持管理については佐野廃寺を考える会が行っている。

4. 史跡としての整備と県指定

平成27年5月、整備委員会による答申がまとまった。町単独での整備も全く不可能というわけではないが、答申に基づき、史跡としてより良い整備を行うためには、塔跡と金堂跡に限った部分ではなく、佐野廃寺全体として評価を行い県指定を受ける必要があった。

しかし、県指定に必要な全体としての評価は、困難を極めた。南北の規模が確定していなかつ



写真2 現地説明会の様子



写真3 佐野廃寺を考える会の活動（史跡の維持管理）

たからである。概要のみが報告されている佐野廃寺の南北規模は最大で150mとされていた。かと言って、現地周辺は現在、宅地化しており、発掘調査が実施できない。

もはや、既往調査の原図にあたるしか方法は残されていなかった。県文化遺産課高橋智也氏及び紀伊風土記の丘富加見泰彦氏の指導・協力の下、北限の溝の原図の発見に成功した。このことにより、南北は114mと確定し、全体としての評価が可能となった。その結果、平成28年3月、町指定史跡「佐野廃寺塔跡・金堂跡」は県指定史跡「佐野寺跡」となった。

5. まとめと今後の課題

調査 今回の調査により、基壇の築成において、金堂については地山を一部利用して高さ調整しつつ版築されるが、塔については掘込地業のうえ版築され、さらに木製の外装を行う。築造順については、既往の調査成果では、金堂跡周辺からまとめて川原寺式軒丸瓦が出土する一方塔跡周辺からは本薬師寺式軒丸瓦が出土すること、さらに金堂基壇に沿った溝状遺構から7世紀なかごろの須恵器杯蓋が出土したことから金堂、塔の順に築造されたとされている。今回の調査では、塔跡基壇土中の瓦の出土等はなく、既往の調査成果による所見を補強するには至らなかった。寺廃絶以降については旧耕作時までの情報が少なく、不明である。また、六角形掘立柱建物（六角経蔵）・大型柱穴（木製燈籠）の評価についても確定したわけではなく、今後調査の機会が得られることを期待したい。

保存と活用 県史跡となったことで、より良い保存と整備が可能になった。今後は、答申に基づいた具体的な設計を行い、整備の実現に向け一步一步の積み重ねを行うとともに、整備後の活用についても住民との対話を続けていきたい。

新宮城武家屋敷と中世の物流拠点

—新宮市 新宮城下町遺跡の発掘調査—

公益財団法人和歌山県文化財センター 川崎雅史

1. はじめに

新宮城跡、新宮城下町遺跡の第1次発掘調査は、新宮市文化複合施設建設に伴うもので、新宮市の委託をうけて、平成28年2月から6月にかけて実施した。調査箇所は、国指定史跡になっている新宮城跡西側の旧丹鶴小学校敷地内で、付近の標高は約9mを測る。調査面積は1,171㎡で、調査区は1-1区と1-2区の二つに分かれる。第1遺構面で江戸時代、第2遺構面で古墳時代初頭から室町時代、第3遺構面で縄文時代中期の遺構を検出した。

2. 新宮城周辺の歴史

熊野川は河口付近に大きな沖積平野を形成せず、山間部を抜けてすぐに海に注ぐことから、河口付近を占める新宮市街地の遺跡は少ない。古代以前の遺跡は、おおよそ熊野川右岸に沿う微高地上に立地し、縄文時代から中世の遺跡である速玉大社境内遺跡や、弥生時代後期～古墳時代の竪穴建物が見つかった阿須賀神社遺跡などがある。

平安時代後期から鎌倉時代にかけて、熊野三山への参詣は上皇・貴族により隆盛を極める。新宮城が築かれている丹鶴山一帯は、熊野三山の一社である熊野速玉大社から阿須賀神社への参詣道沿いに位置し、古くからの要衝の地にある。近世の編纂書である「熊野年代記古写」を根拠にすれば、付近には、平安時代頃には熊野別当が別邸を築き、平安時代末頃には別当屋敷が移されたともある。その頃に、丹鶴城の名称の由来にもなっている「丹鶴姫」が東仙寺を建てたとの記録も残り、同じ頃に丹鶴山南麓には香林寺（宗応寺）があったとされている。また、丹鶴山周辺からは、中世墓地の遺物として東海地方の陶器類が多く出土しており、場所を移した現在の東仙寺や香林寺に伝わる五輪塔や宝篋印塔などの供養塔も、これらの墓地に係るものであるとされている。

鎌倉時代を過ぎると、熊野別当の勢力が衰退するが、熊野三山の上位の役僧である宮崎氏が東仙寺を修理し、新宮城の二之丸である現正明保育園付近を居館としたとある。戦国時代になると堀内氏の力が台頭し、戦国時代末には丹鶴山に城を築き、麓に城下町形成を行ったとの説も伝わる。



周辺の遺跡



遺跡近景（西から）

近世の新宮城は、関ヶ原の戦いの後、紀州藩主となった浅野幸長の重臣である浅野忠吉が慶長六年（1601）に築城を開始した。元和元年（1615）に一国一城令により廃城となるが、元和四年（1618）に再び築城が認められる。しかし、元和五年（1619）に幸長が広島に転封になるのに伴い、忠吉は備後三原城へ移る。紀州藩主には徳川頼宣がなり、新宮城には付家老である水野重仲が入り築城を続け、2代重良は伊佐田の堀を掘削するなどして、寛永十年（1633）に完成した。城下町も、江戸時代の初期には、幕末に近い町割りとなっていたことが絵図などから窺うことができる。

3. 調査の成果

① 第1遺構面

新宮城下町の南北に伸びる道路と武家の屋敷地を検出した。

道路は江戸時代に「河（川）原町通り」と呼ばれ、対応する石垣の特徴から、その構築が江戸時代初期まで遡ると考えられるもので、道路面は掘割状に屋敷地より約0.6 m低く構築されている。構築当初は西側のみに、幅0.3 m、深さ0.3 mの石組みの側溝を設置する。道路幅は5.2 mを測り、路面には1～5 cm程度の円礫を敷いて敲き締めている。出土遺物から道路は18世紀後半頃から昭和にかけて5度以上嵩上げし、昭和21年頃まで使用されていた。

屋敷地は道路より東側で2区画、西側で2区画確認している。屋敷地を区画した石垣は、江戸時代初期の浅野期に描かれた『紀州新宮絵図』と対応する位置関係で検出されており、絵図の正確性を証明する。石垣は花崗斑岩で築かれ、積み方は位置ごとで異なっており、道路に面する石垣や西屋敷北側を区画する石垣に大きな石材が用いられている。特に、西屋敷地北側の石垣は、残存高が1.3 m程度を測り、その積み方から構築時期が江戸時代初期に遡ることが指摘されている。また、他の石垣についても、道路同様に構築時期とみられる江戸時代初期から移動されておらず、何度かの改修を行いつつも構築当初からの原位置に遺存していることが窺える。

屋敷地内の遺構としては、屋敷地入口の階段の一部や框石、礎石列のほか、周囲に石組みをもつ土坑・埋甕・埋桶・集石遺構・塵芥穴の可能性のある大型土坑などがある。ただ建物プランを想定できず、屋敷内の構造は明らかにはなっていない。

遺物は近世陶磁器類や銭貨などが出土している。



新宮古図（1647～1651）（新宮木材協同組合蔵）



幕末頃の調査区付近の絵図（新宮市立図書館蔵）



1-1区 第1遺構面全景（上空から）



第1遺構面 道路遺構（南から）



第1遺構面 道路遺構に面する石垣（北西から）



第1遺構面 道路遺構に面する石垣（西から）



第1遺構面 道路側溝（北から）



第1遺構面 西屋敷地北側の石垣（北西から）



第1遺構面 埋桶遺構（西から）



第1遺構面 石組み土坑・埋甕遺構（北から）

② 第2遺構面

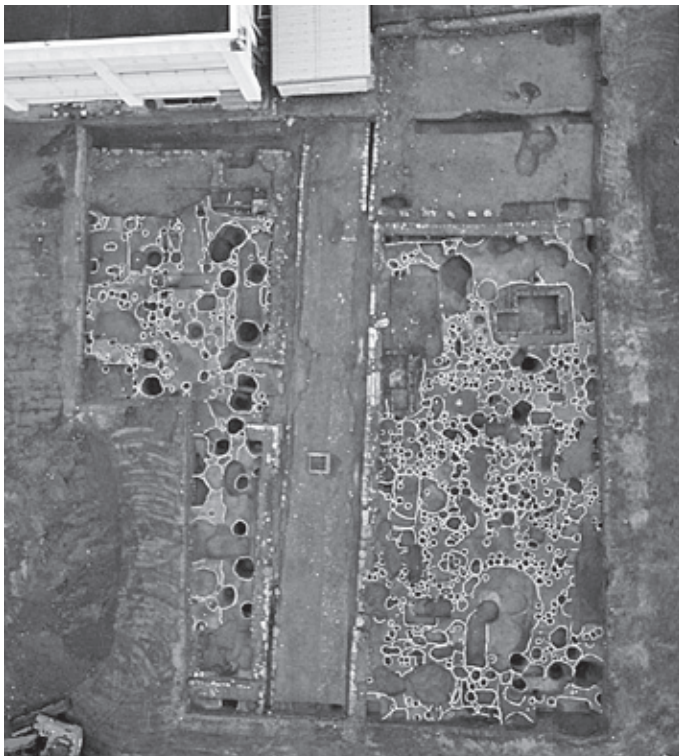
古墳時代初頭頃から室町時代にかけての多数の遺構が重複して存在する。検出した遺構には、古墳時代初頭から前期の土坑、鎌倉時代から室町時代にかけての掘立柱建物4棟以上・地下式倉庫4基・大型土坑26基などである。

古墳時代初頭から前期の土坑は3基確認しており、このうち2基からは、比較的完形品に近い高杯・鉢などが出土している。また、須恵器の破片が調査区の各所で出土していることから、古墳時代中・後期にかけても生活が営まれていたことが窺える。

掘立柱建物は、調査区の東側中央から南にかけて集中している。想定できる建物では、柱間が2.1mで6間×4間の規模のものがあり、当時として大きな建物と言える。柱穴の直径は30～50cmで、基本的に底には据石を置いている。4棟の建物以外の柱穴も多数存在することから、鎌倉時代から室町時代にかけての掘立柱建物がほぼ同じ位置で、何度も建て替えていることが窺える。

大型土坑は、直径1.0～2.0m、深さ1.5～2.5mの規模をもつ。断面観察で柱の痕跡を残すものや、底付近に10～30cmの礫が詰められたものがある。調査区の西側で検出した大型土坑は、ほぼ南北に列をなしており、大型の構造物が建っていた可能性もある。また、土坑の一つの底からは、14世紀代とされる鏡が出土しており、その特殊性が窺える。

地下式倉庫は、A（地下式倉庫1・2）とB（地下式倉庫3・4）の二タイプに分かれる。Aタイプは本体部と一段浅い突出部からなり、壁を石積みしたものである。地下式倉庫1は本体部が2.65m×2.3m、深さ1.7mで、突出部が1.5m×1.2mで、本体部より0.6m浅く、底と石積みの目地に黄橙色の粘土を貼る。地下式倉庫2は本体部が2.25m×1.8m以上、深さ1.5mで、突出部が1.5m×1.0mで、本体部より0.4m浅く、底・壁全面に粘土を貼る。類例から15・16世紀に帰属するものとされる。Bタイプは素掘りの竪穴の底面に石を並べるもので、地下式倉庫3は



1-1区 第2遺構面全景（上空から）



1-2区 第2遺構面全景（上空から）



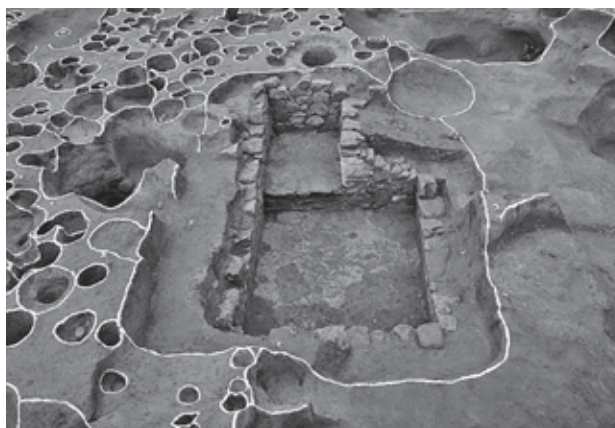
第2遺構面 古墳時代初頭の土坑



第2遺構面 掘立柱建物群（南から）



第2遺構面 大型土坑列（北から）



第2遺構面 地下式倉庫1（東から）



第2遺構面 地下式倉庫2（東から）



第2遺構面 地下式倉庫3（北から）



第2遺構面 大型土坑断面（北から）



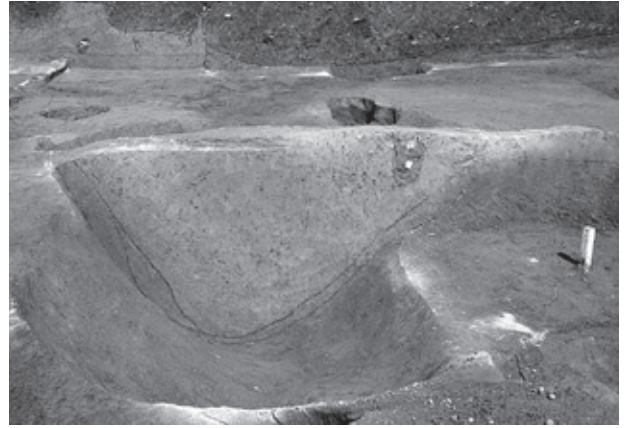
第2遺構面 大型土坑石出土状況（東から）



大型土坑出土の鏡



第3遺構面 縄文時代の遺構（上空から）



第3遺構面 縄文時代の土坑断面（東から）

4.5 m四方、深さ 1.2 mの竪穴の底に 3.3 m四方で川原石を並べる。神奈川県鎌倉市の海浜部を中心に確認され、石の上には根太を置いて柱を組む構造であることが分かっている。検出状況などから湊に建てられた物流に係る倉庫であると評価され、13・14 世紀の遺構とされている。近畿地方では初めての発見である。

遺物は、在地産の土器類のほかに東海地方の土器・陶器類や青白磁・青磁・白磁などの中国製品が多く、銭貨や砥石・茶臼のほか五輪塔・宝篋印塔などの石製品も出土している。

③ 第3遺構面

調査区全面に縄文時代の遺構面が存在するが、調査は一部分に留めている。縄文時代中期の土坑や小穴、浅い落ち込み遺構などを検出している。土坑は楕円形で 1.5～3.0 m、深さは 0.5～0.85 mを測る。遺物は、縄文土器のほかに石錘や剥片石器などが出土した。利器の石材はサヌカイトではなく、地元産の頁岩などが使用されている。

4. まとめ

第1遺構面で検出した城下町の道路や石垣からは屋敷地の規模も復元でき、江戸時代初期からの新宮城下町の街路状況を窺うものである。家臣の屋敷地でありながら、熊野川沿いで調達できる花崗斑岩をふんだんに使用して城と変わらない様な重厚な石垣を築いているのが大きな特徴で、近世の城下町における都市構造を現在に遺存する極めて重要な遺構と評価することができる。

第2遺構面で検出した鎌倉時代から室町時代にかけての地下式倉庫や掘立柱建物・大型土坑などの遺構および石塔などの遺物から、熊野別当に繋がる有力者の屋敷地や寺などの存在も考えられる。一方、調査区が熊野川に近く、付近に湊が想定できることから、地下式倉庫が湊に係る施設とすれば、掘立柱建物群については湊を管理する有力者の屋敷であった可能性も窺える。そう考えた場合、山間部の物資を積み出す湊としての機能以外にも東西日本を結ぶ中継地・物流拠点としての要素が大きいと言え、中世の海上交通を考えるうえで極めて重要な発見とすることができる。

御坊市小松原銅鐸・亀山城跡

—新規県指定文化財の紹介—

和歌山県教育委員会 丹野 拓

はじめに

平成28年3月15日、小松原銅鐸と亀山城跡が和歌山県の県指定文化財となった。

銅鐸は弥生時代の釣鐘形の青銅器で、紀元前2世紀から2世紀頃まで製作・使用された。農耕祭祀具との説があるが実際の用途ははっきりとはしておらず、集落外に埋められたものが出土する機会が多い。大きさは20cmを切るものから1mを超えるものまであり、吊り下げる鈕の形状で4つの形式に分けられており、古いほうから順に菱環鈕式、外縁付鈕式、扁平鈕式、突線鈕式と変化する。小松原銅鐸はこのうち外縁付鈕式の銅鐸である。

亀山城は日高郡を代表する中世城館跡の一つである。中世には全国いたるところに城や館が築かれているが、亀山城跡は大型の山城である。平時の居館とみられる湯川氏館跡と組み合わせる有事の詰城として機能する「根小屋式城郭」と考えられる。

小松原銅鐸と亀山城跡は時代も種類もまったく異なる文化財であるが、銅鐸出土地の背後にある山城が亀山城跡であり、同地域の文化財といえる。私はこのうち小松原銅鐸の県指定に多少の関わりをもったが、亀山城跡を含めて話をしたほうがよいと思うので、これらの調査・指定に関わった方々に代わって紹介したい。

小松原と亀山

JR御坊駅の南にあるロータリーに降り立って左を向くと、学校の敷地がみえる。この紀央館高校と湯川中学校の敷地付近が、弥生時代以降連綿と続く小松原Ⅱ遺跡である。小松原Ⅱ遺跡では弥生時代中期の集落がみつかり、多数の竪穴建物跡が確認された。また、小松原Ⅱ遺跡と重複する形で中世の日高郡をおさめた室町幕府奉公衆の湯川氏の館跡が発掘調査されており、堀や井戸などがみつかり、

今回はこの小松原Ⅱ遺跡の北東隅で出土した小松原銅鐸と、湯川氏館跡の北側に隣接する詰め城、亀山城について紹介する。御坊市の駅前にはたくさんの文化財があることを知っていただけたらと思う。



図1 御坊市小松原・亀山周辺

■小松原銅鐸

小松原銅鐸は御坊市湯川町小松原で発見された銅鐸である。昨年度、県指定となったが、紋様が摩耗していることもあり、どこを注目したらいいのか分かりづらいので、少し細かくみていこう。

この銅鐸は、昭和16年に牧師の升崎外彦氏が御坊駅から線路沿いに隣の道成寺駅方向に向かって歩いていったとき、500mほど東の水田畦畔で足をすべらした際に、幅約50cmの溝肩に半ば露出しているところを発見したものであるという。

図1で確認すると分かるように、そこは御坊市湯川町小松原と御坊市藤田町吉田の境で、雨が降ると北の谷筋から多量の水が用水路を流れる谷筋となっている。出土位置は小松原Ⅱ遺跡の東端であるとともに、津井切遺跡の西端、富安Ⅰ遺跡の南端でもあり、写真1で分かるように、亀山から流れて来る水路から水を引き込んだ土手のあたりで出土したということもできる。

この銅鐸はやや破損しているが、復元すると高さ約21cm、幅約13cm、奥行き約8cmとなる、和歌山県内で最も小さい銅鐸である。銅鐸は小さくシンプルな「聞く銅鐸」から、装飾の付いた大きい「聞く銅鐸」へと変化していくものなので、古い銅鐸だろうと予測がつく。

この銅鐸は鈕の形状が外縁付鈕で舞（天井部）の型持穴が2か所あり、身の型持ち穴が第2横帯のある位置より上に位置し、難波洋三氏のいう外縁付鈕2式段階の資料にあたる。和歌山県では紀北の太田・黒田銅鐸と並ぶ古い段階の銅鐸であり、和歌山県の銅鐸の始まりを考える上で重要な資料といえる。

表面の紋様は摩耗によりほぼ残っておらず、保存処理で樹脂を含浸させたこともあって、観察しづらくなったようである。しかし、よく見ると片面の身の中位にはわずかに帯状の隆起がある。また、かつての実測図では、もう片面の上部には横帯の斜格子紋とみられる痕跡が認められており、4区袈裟襷紋の銅鐸であった可能性が高いように思われる。

身の厚さは0.2～0.3cmで、鱗部の幅は1.1cmと短い。身部では若干の鑄型ずれが確認されるが、上部と下部でずれる方向が異なり、ややねじれた状態となっている。鑄造時に溶かした銅を注いだ際の湯まわりが悪く、鑄造時のものと推定される小さな孔が、舞（天井部）や身・裾部にみられる。採集時前後に破損した部分もあるようで、鈕の上部及び身・裾部に新しい割れが確認される。

内面凸帯は各面の中央付近が平坦になっており、磨り減りの跡と考えられることから、舌（ぜつ）を当てて鳴らした「聞く銅鐸」として使用された痕跡とみていいだろう。



写真1 小松原銅鐸出土地付近から亀山を望む

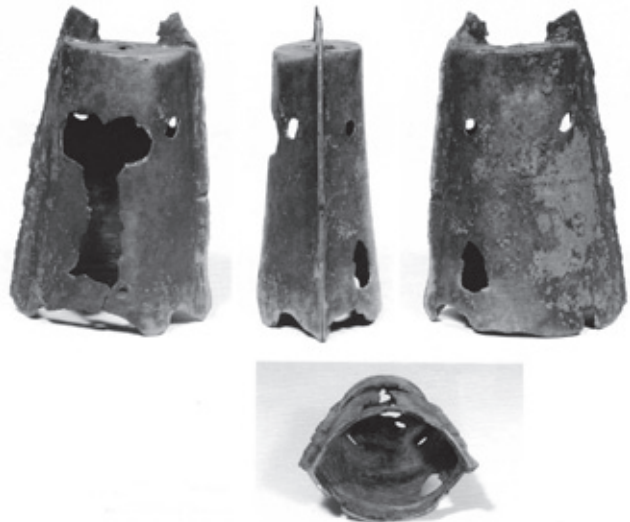


写真2 小松原銅鐸（文献1より）

■ 亀山と向山、鐘巻の銅鐸

写真の銅鐸は右から順に、亀山1・2・3号銅鐸である。復元高は25～30cm程度と推測され、小さい部類の銅鐸といえる。紋様は4区袈裟襷紋で、扁平鈕式新段階の銅鐸である。別名朝日谷銅鐸といわれ、亀山(丸山)の北側の尾根筋にある朝日谷で出土したものとして知られている。

亀山銅鐸は小松原銅鐸よりやや大きく、鈕や鱗が広く装飾的な要素が強くなっている。

なお、小松原銅鐸は別名朝日銅鐸とも呼ばれたことがあるが、小松原地内には朝日という小字名がない。亀山銅鐸との名称混同が原因とも考えられるが、出所はよくわからない。

小松原銅鐸、亀山銅鐸の後、周辺ではさらに大きく、装飾性を増した大型の突線鈕式銅鐸が出現している。向山1・2号銅鐸と鐘巻銅鐸である。向山1号銅鐸は高さ82.2cm、2号銅鐸は復元高88.6cmであり、飾り耳をもった大型の近畿式銅鐸である。道成寺付近で出土した鐘巻銅鐸はさらに大きく、復元高約120cmにおよぶ県内最大の銅鐸である。道成寺の鐘というと安珍・清姫の物語に登場する寺の鐘が有名であるが、それより千年前の銅鐸も道成寺の宝物館に展示されており、見事なものである。



写真3 亀山1～3号銅鐸(文献1より)

■ 弥生時代から中世まで

古墳時代の亀山には計13基から成る亀山古墳群が築かれている。これに対して、向山と鐘巻の銅鐸が出土した付近には、それぞれ向山古墳群、箱谷古墳群が築かれている。古代にはそれぞれ紀臣、紀内原直がいたあたりと推測されるが、ともに紀ノ川筋から緑色片岩を持ちこんだ古墳がみつかり、海上交易に関わる有力な氏族がいた地域なのだろう。

また、奈良時代には道成寺のほか、小松原Ⅱ遺跡でも瓦が出土しており、調査を担当した和歌山県文化財センターの川崎氏は『日本国現報善悪霊異記』に登場する「別寺」ではないかと指摘している。

古代には堅田遺跡や蛭田坪遺跡付近に郡衙があったと考えられている。小松原・亀山周辺にはいくつかの重要な地区があり、弥生時代から古代・中世まで続いていく様子がうかがえる。



写真4 亀山から小松原方面を望む

■ 亀山城跡

亀山城は室町幕府奉公衆の湯川氏の居城である。小松原館のすぐ背後にある標高121mの亀山に詰められた城として築かれたが、天正13年(1585)の羽柴秀吉の紀州攻めの際に焼失した。

亀山城は、頂上部に大規模な土塁や高い切岸を巡らせた2段の主郭部があり、派生する小尾根上と山腹を取り巻くように長く伸びる腰曲輪及び帯曲輪を階段状に配置する構造をもつ。周囲は約2km程あり、県内最大規模の山城である。

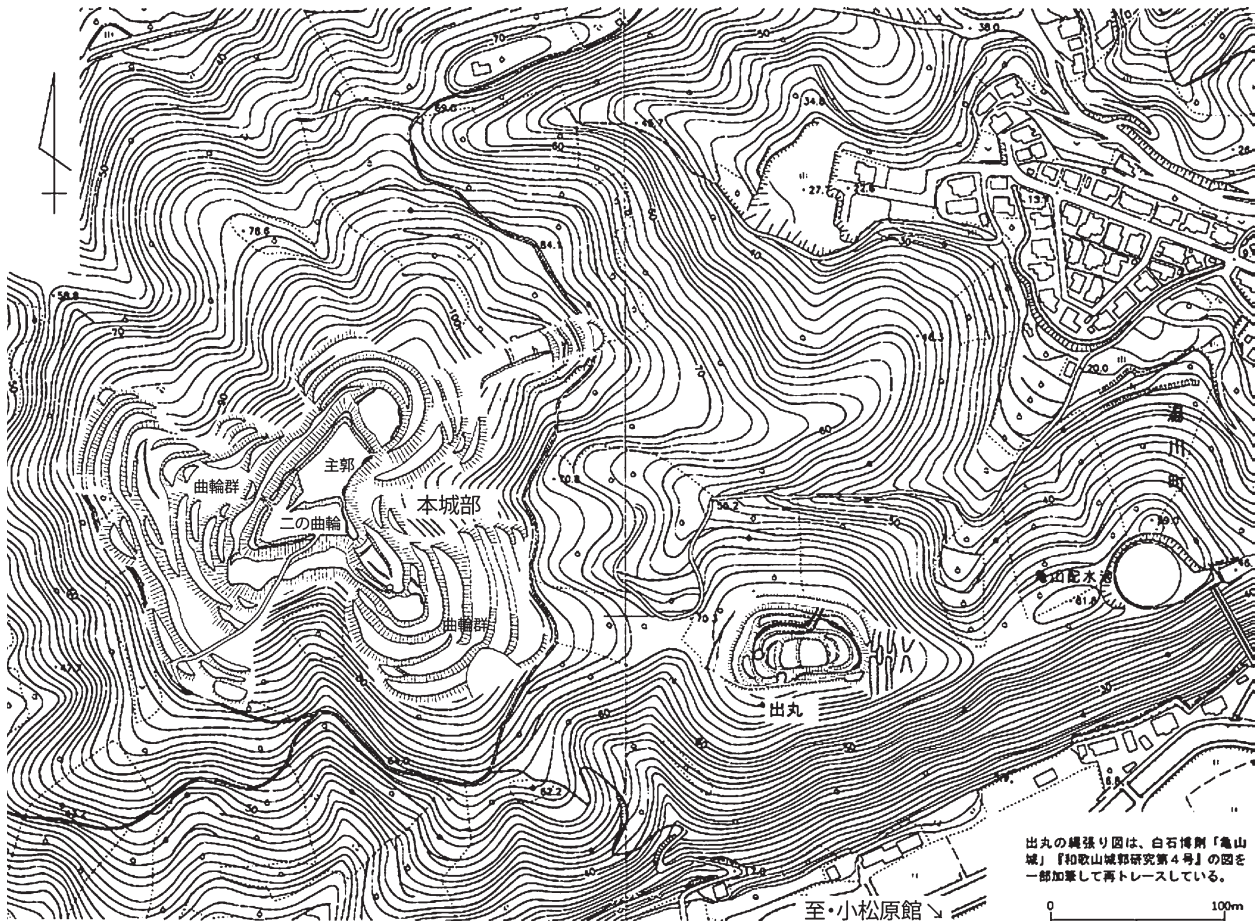


図2 亀山城跡（文献2の図を加工）

主郭部は頂上部を占める曲輪とその南に取り付く曲輪で、その周囲をめぐる大規模な土塁は、天正期に構築された特徴的なものとみられている。曲輪の西と南には虎口があり、南虎口が大手であろう。また、東の山頂には出丸を築いて、防御をはかっている。

亀山城跡の主郭は現在、公園となっており、日高平野が一望できる。平野部を見ると、山麓まで水田が広がっているが、従来「小松原」の南に旧河道の氾濫原が広がっていた風景を目に浮かべて眺めると、小松原・亀山の日高平野での位置がわかりやすくなることと思う。

おわりに

今回は、県指定考古資料・小松原銅鐸と、県指定史跡・亀山城跡という、二つの新規の指定文化財を紹介した。近年、御坊駅周辺では小松原Ⅱ遺跡と湯川氏館跡の調査が進展しており、これらの遺跡とともに地域の歴史を語る資料として有効に活用されることを期待している。

参考文献

- 1 和歌山県立紀伊風土記の丘 2012 『紀伊弥生文化の至宝』
- 2 (公財) 和歌山県文化財センター 2016 『公開シンポジウム—紀中・紀南の旗頭—湯川氏の城・館・城下町 発表資料集』 (所収：川崎雅史「湯川氏館跡の発掘調査」、白石博則「湯川一族の城—縄張り調査から考える—」他)

地宝のひびき

—和歌山県内文化財調査報告会— 資料集

発行日 平成 28 年 7 月 16 日

発 行 公益財団法人和歌山県文化財センター

〒640-8301 和歌山市岩橋 1263-1

TEL : 0 7 3 - 4 7 2 - 3 7 1 0

Email : maizou-1@wabunse.or.jp

URL : <http://www.wabunse.or.jp>

印 刷 株式会社 協 和

表紙写真：新宮城跡、新宮城下町遺跡第 1 次調査
調査区遠景

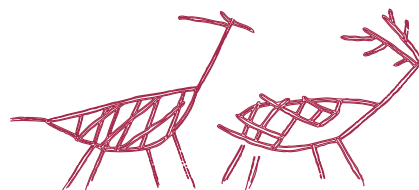


新宮古図（1647～1651）（新宮木材協同組合蔵）

地宝のひびき

—和歌山県内文化財調査報告会資料集—

- 甦える岩橋千塚の王墓
—天王塚古墳の発掘調査—
- 大池遺跡と火山灰考古学
—旧石器時代から縄文時代の遺跡調査—
- 中世荘園の再開発拠点？
—寺内古墳群、相方遺跡の発掘調査—
- 住民との協働
—佐野寺跡の県史跡指定—
- 新宮城武家屋敷と中世の物流拠点
—新宮城下町遺跡の発掘調査—
- 御坊市小松原銅鐸・亀山城跡
—新規県指定文化財の紹介—



公益財団法人 和歌山県文化財センター

〒640-8301 和歌山市岩橋1263-1 TEL：073-472-3710
URL：http://www.wabunse.or.jp/